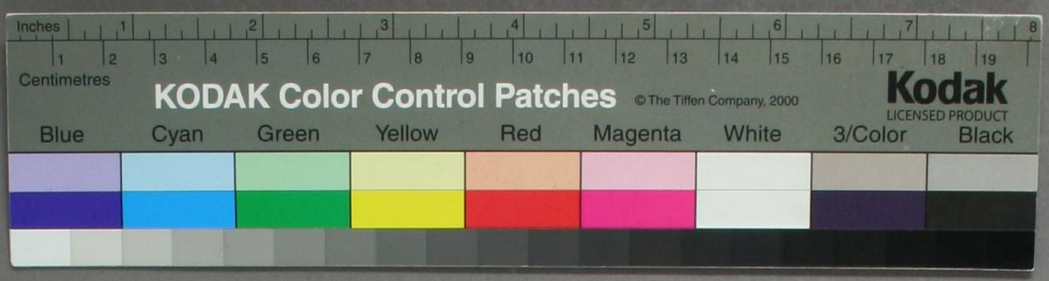


D 9
4448
NO 7629
87

ロ9
4448

目録

女今川姫鏡（とんかいまがひめかゞみ）全

鏡の由来
清厨子恵棚様子弁
夜更姫之事
光明皇后れす
小池小町の事
赤坂左衛門の事
神功皇后の事

女今川の細注
五言句の由来
房京伯の母孝行の事
白柏子微妙の至孝
雀簡の妻妙貞節
婚礼仕用之儀式
鳥毒の図

鹿茶屋後の和歌
折敷の図
紫式部の事
小式部の内侍の事
女教訓詞絵抄
七夕祭器弁詩会
一代せり本号の事

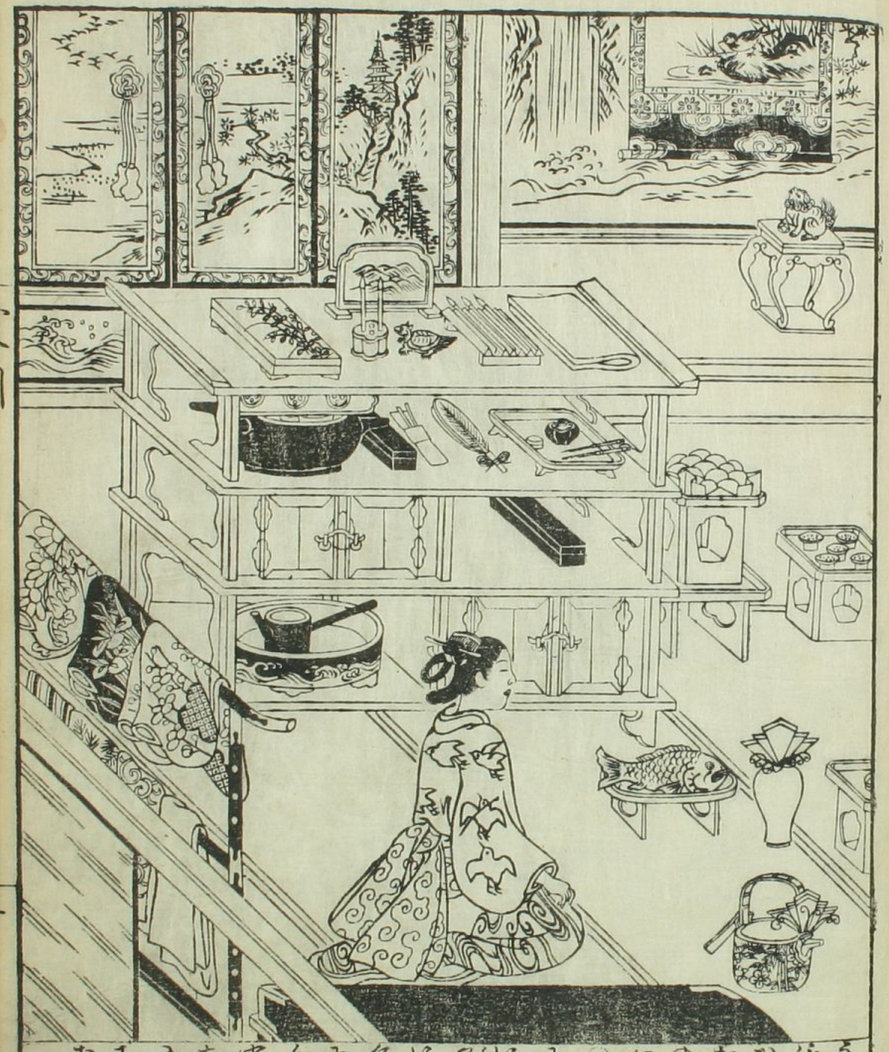
伴四郎の妻忠義
魯婦人我子を抱す
宮司の居義をもつす
女舎礼図抄
給仕之仕せ忠式
男女相生吾恵
探花敷の図

和泉式部の事
式子内親王れす
六所仏
所かるとすべ柏
深柏の秘伝
志之柏おくし柏
美陰合せの事
京女郎詞上せ
女用文章日用匠使
女中みの封ぐ柏
女ことすこ草
口は禍の門と云除
乾如我日
不如我日
守本号と知る所
和所三神儀

<2002-271>

鏡の由来
鏡といふは天照太神
天の宮戸よこりしせ
あひ天下常暮と
なる法神かすしを
日神のかくらとうつし
鏡といふもをいく坂
本の枝よりげかゞと
をうしいのまゝあふり
天照太神宮戸より
出あんばとて世に宮
されて日月光りかく
あきしとなり
かゞりん今禁中に侍
る内侍所小納り日本
の宮とすらう鏡者
は唐梁の武帝れ
后くゝ出させ淫女
とうつしけるへ名やう
なされて是より女人
おまゝ称く用るとなり
たゞ人熟客はあるたゝの
くりあらぬすれいと照
に姫鏡と見号にのゝ

祝言乃道具
かざりやう家に
よりかわりあこと
いへども格式上ハ
記を
御厨子棚ハ床
のたにかざるべし
上ハ棚ハ硯箱
筆墨墨合料
紙ハ右硯箱ハ左
石屏ハ水入なれ也
料紙箱ハ右筆
墨たにかざる
筆立ハ石屏乃
お次ぎ入なり
中ハ棚ハ右ハ
香盆羽箒右
ハ一對あり添て
かざるべしたハ耳
はのぐひ添ゞ



うがひ盃二つ
添て錺べし下ハ
たらいあるひと
おしてゆに柄長
の湯桶右ハまゝ
筆ハ箱なり
○忌棚の上ハ
ハ短冊箱中
ハ硯ばこ右ハ
筆ハ手ぐ中の
ハ箱ハ書
色々下ハの棚
ハ右ハ角
ぶらいまくし
中ハ石のえこ
たまハ十二組
入けもやう乃
ハ具をかざる
なり

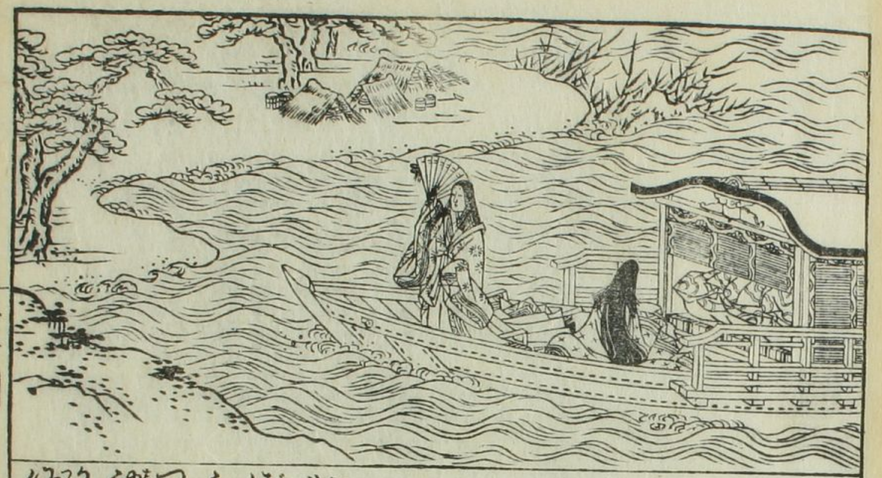
和国女今川抜書

衣通姫

衣通姫の人となり共允恭天皇の后まで
ほしくつひにかの人の御そばにめしよせ
御衣のそでまでとおりしゆへかくいひ
天皇衣通姫てふひめにおはしませしより和歌浦
小あそびの舟遊ひかの人后までの出
もづく玩物てうあそびの座のうたゝ
をまねびんあまやふるうに遊風あ
らく吹てそれをうたふてんともてば
天皇をはじめ奉りその供奉の人を
のくさうどうのぐも后までのてさうど
始てそれでてに立ちくこそのほ寄に
日のすくはおまひきれみやこのう
わさ君のみとそうしとや
かよふみのへい詩歌あだ遠あめぞ
くあまそのぐれのつくもかくさうぬ
きうれいは遊風もちがまりほあをを
るにくくう衣通姫のゆるい風の姿

婚姻之儀式

世の人の一家ひろくあるそのりは
女なよう始より終人と仕人縁を
組そめんうその縁をくまそ
げり緊昌松をも根えの嫁今れべ
下にくれ人もそまふをうべとぐ
まてれへきうそし女いまのおと
我家とするの女商しまふ宝紙
米嫁する先の人婚たいつ縁組
宝て男の方より女の方へ結納つ
なをる結にこれをかのをつうとと
いつふ袖二つ四つ裏おりて向く
うい表紙裏いねそにてもいつれ
も一揃づにて杉赤二枚ふそほく
中とおりて結也裏表うう
熨斗のうを添べき着の時
斗杉二枚着いらぶすめ組鮑
うをぶし三荷二荷の肉鮑う
ぶをやしく中うて小なの結ひ
づにて今紙も杉着と添也又仕り



遠菜の墨ところやれ小もも名
ばく東あり古つ能甲斐の
うかひあるう得也人をすれ菜ひ
つふふ不老の死の菜ひり仏人
和通ひそい墨ふあるうまう住
うしとい又は貝あ度作也人
仕りて往そこの暮とするう

下にくいちうと活びて始たれ仕り
老日てそうる遊お遊びてうへ
もれ上ほうこの君かかうへいお
人の高人人いなるそ君方様
をもけるそをもするなそと関係
の名称ひて表向の仲人よいちうと
うう人をあるう人とて式い物
の師匠髪あ子のあ祝と来ひり
仲人とすべうきのへいう男のと
らるう高ありのを表向の仲人を
もべ始のれの新う始の何よ分ても
ふ新今ひるれみへ出まきのう新
きりのもうこの方ひこのうこと
ほべ衣紙をこうをうの仕うんた
新人ひしまる地れう者い婚
れの新ををこうの物仕様のに
まる色お日にうをるにあ一着
に在様次をれもいんで棚
のあ人今この色新うこうをるの
みをそれうくれもれいごて新

の御法までもひろめて給ふなり
しかるにそのゝち聖武天皇の御世代に
御示現ありて御前に
立給ひしもこの世にあらはれ
給ひしより和歌にてあらはれ給ふ故
に紀州にて和歌浦に玉津島と申て和歌
の神とあがめ奉り和歌の神として
しかるに道まもり奉るためなり

光明皇后

人皇四十五代聖武天皇の御后にて淡海公
第二の姫也 この后仏道を信じ給ひ施をほどこせ
し天下に寺々を建立し給ふ事あまた
あらたなる人の姿をあらはしたまへる
かくて天皇諸宗のために浴室をかまへて今
我千人の浴湯供養を施し給はんと誓ひ
給ひし時に千人の垢をすりて垢をさ
らせ給ひけるに九百九十九人を洗ひ給ひて
千人にあたる病人のあらはれ来りて
かたゐ癩病人なるが御后に来て湯あみ
させ給へと申すにぞ病人の苦げなるさま

高砂の尾上の古今集の
序にも高砂住の江の
松もあひおひのやうに
おほんとある尤も祝
言によく叶へる
也 用ゆる事や

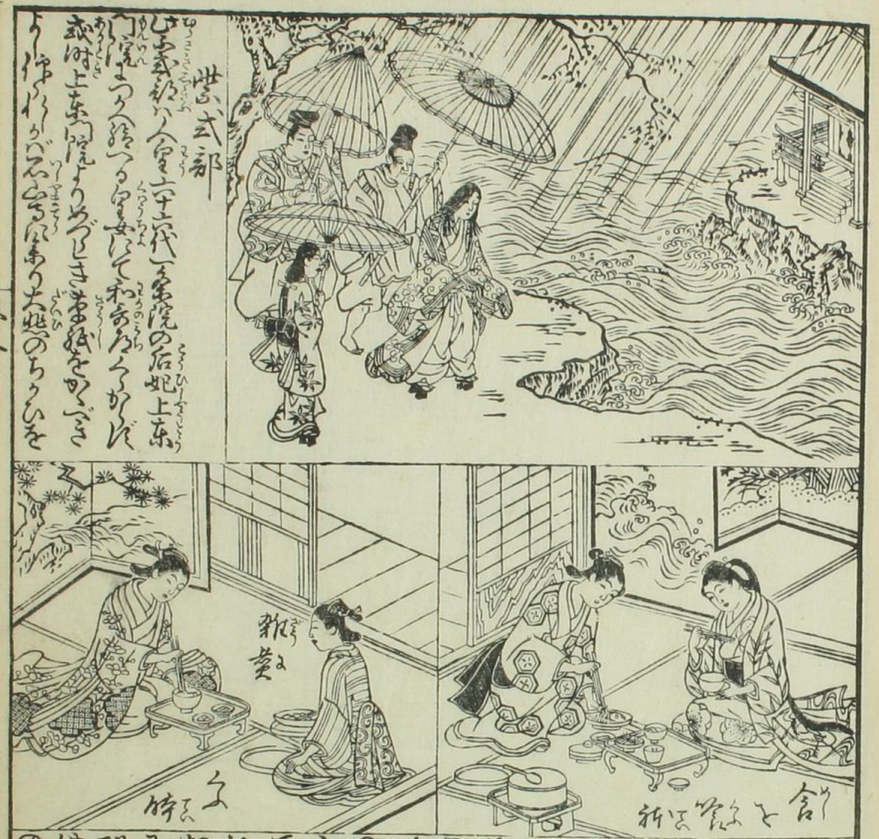
の物に用ゆべし 又もおよそ一ツ二ツたるの
あつらへ作りたる事のもあるべし 寄
のものにたてそむる事もなく島台には
それを作りて松竹梅鶴亀の飾りつけ
翁媼の作り物居り 蓬莱の台に飾りあるを
台にて挑灯など二ツ三ツつけて上下の家
せしめ給ふ時はそのむかしの式ありしは家
あるかのへかた一ツ 後にて作べし
もこれ方にもお尋ねて作る
任せて一ツ有物を以て桶とて式法
かの祝言の時の作り物
つぎかけ一ツ上に作り式法にて
かたちに作りてそれに置くなり
おりそへてもよろしきの事の作り物
てをかけて花ゝかける作りの作法也
ひとつ一ツ上に作りて一ツかけ
よろこびの祝の品々にて
いひそへ祝儀の席には島台ひとつ
まことに作りて飾りて床に置く事
出る時は祝儀の席に飾るものなり

のふみをとらずして金んにくしと后やむ事なく
いだき給ひつゝまさりて自ら口を吸ひ給ひしかば
病人はたちまち阿閦仏と現じ給ひて后
今は法をすゝめよと宣ひ給ひて消給ひしぞ
更に病人仕方がたき事にて今も
もやしむかし功を立ててある事を
あらひ給ふ人にありがたき事ども

食礼

七五三にても三五三にても客の膳にても
まづ食事の時は膳のまへに居る女
大きなる椀の蓋を取り箸をとりて
いかにも心して手に持つべし
さて汁の椀の蓋を取りてのち
あまたに廻してから飯を食ふべし
けふの膳はこの膳のさきにて取るべし
何にても二の膳のさいを取る事なし
ある膳を取りてもさいを二
度に三度ほどつけて食ふべし
かくさいを二箸まで食ひてそ
かの女の見てあつかひ手をもつて
まかなひもちてのちに汁をかへて
汁の膳をまはりてのち汁をかへて
ゆのあれば汁をかけ食ふべし
に食べたる後にて湯をのみ
ゆかりの汁もかへてのち汁
○ 雑煮くふの事は正月の祝ひ事なり
べし汁をすひてのちに食すべし

客の膳の時よりのちに女のむき居
よその人のある上座にすへて後待女
の向ひにすわりて付けて待つべし
の膳をさげて客の方へ向きて
小皿にのせてよびかへるなり
上つかたの女中には客の方にて下
に控へて待つべし
にしたてむかしより吉例の式
三献の三方をもつて出だす式
加へ銚子を持ちて座敷にて出でる
女中の銚子の酒を注ぎて男の銚子へ
銚子の酒を注ぎて男の銚子の加へ
うけて出る女はその座にて盃を
三献の後に祝言の盃を取りて
にしき三献の盃を肴の膳にて出す
の盃にて婿の盃の後にその盃を
ひとつのひと口くらひて三献つゝ出す
盃へ一つの酒をつぎてさしつけこれも
くらひて三献つゝ三献めの盃は婿のを



○湯づけ　ゆをそゝぎてめしをくふ事也
○絶飯　ものくふ時のそばにありてくれ刻和
そこにゐて一ぜんめしをくふけしき
歪そのかさねて折ゐるくだけとおり
すぢ違て重ぐ二重一ぜんめしを出る
よあひこれをすゝめるに敵人
みあとへ入ひとりはしをとりあてゝ
てそのまゝ我方へ引ゆくしぐさ
業ゆへ敵人ゐる所へ入ゆきて
平入ゆきて
指てゆく
揚枝ふさてくるべし
みのかゝるものゝ如くにして
の三方とおよびてひこの方へ向ゐ置
てものゝ上に三方とおなじ
も敬ふ心ぞへ置とおなじ
うけてよろこばしとおもひて
ところへそのまゝ逃さんとする
べしむかふより三方ゐ置を
ものゝごとくにして逃る敵人
我れの方へゆきたる時
そのまゝ我れもうしろへ
くるりとむきてはやくにげ
はづしてひこのごとくにして三方づ
にてひこへ置これ敵逃ゆく事を
ひらくべしそのゐれ式作法は
置ものゝ如くにして敵人
そこにゐて一ぜんめしをくふけしき
歪そのかさねて折ゐるくだけとおり
すぢ違て重ぐ二重一ぜんめしを出る
よあひこれをすゝめるに敵人
みあとへ入ひとりはしをとりあてゝ
てそのまゝ我方へ引ゆくしぐさ
業ゆへ敵人ゐる所へ入ゆきて
平入ゆきて
指てゆく
揚枝ふさてくるべし
みのかゝるものゝ如くにして
の三方とおよびてひこの方へ向ゐ置
てものゝ上に三方とおなじ
も敬ふ心ぞへ置とおなじ
うけてよろこばしとおもひて
ところへそのまゝ逃さんとする
べしむかふより三方ゐ置を
ものゝごとくにして逃る敵人
我れの方へゆきたる時
そのまゝ我れもうしろへ
くるりとむきてはやくにげ

さてをれたちまち病人色変じてきま悪
合のそでくゝみ光明のやきをおさへて
去ゆく後その出ふんをあつめ仏
変化しゝゆへなり

小野小町

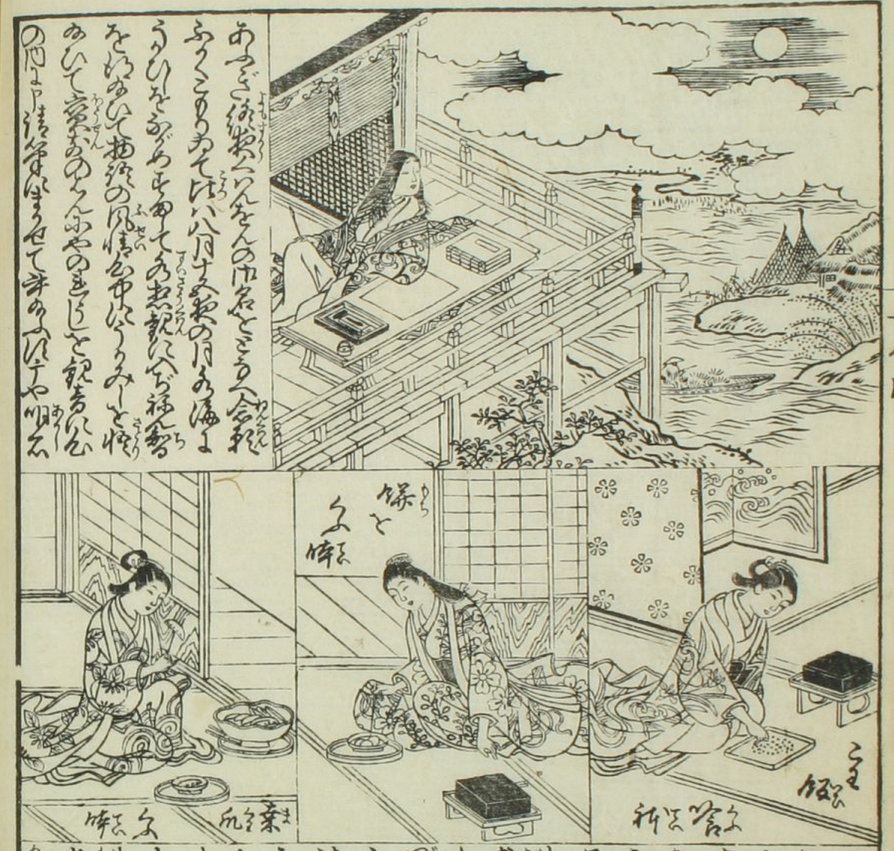
あるとき大きなる日でりして百日
のうちひとあめもふらずそれより
民のなげきとゞまらずゆゑなく
そのきりをしてつまじて
ふく鬼神おそれをそじるといわれ
和尚のおまします中納言のうさ祢が
ひさめの神小町をめさしみてこのうちに
祢ずくてそれから祢和花の池のけよ
いうて呉女郎祢へうく祢和花の日れを
うてそれ

あくる日のうくれいてもひ
さりとていつまであろうそこん
ゆ法のへ祢和歌をおりしてまきみ面
とうし国王をうるかし民の歎でうく也

世武部

むかし武蔵の人宮こ二十三代て采女の石地上東
門院つかへつる女にて和歌のうくかんに
或時上東門院よりめづらしき事柄をのべさ
よゆくりかにかゝるべき大地のちりひを

地ゐを指あてこの中ゐ入ゐてこの後
人いかゞとうかゞゐをするの後指を抜て問ゐて
ふうをするの後指を抜て問ゐて
ふうをするの後指を抜て問ゐて
なるべし我方の後指をゐて指ゐた
指と後指を抜てふたゝび抜たの
ゐをひこの方おゐてゆびこゝろ
ゆの敬ゐへのごとくにてひこゝろのう
ゐをする後敬人逃ゐとゐ置ゐ
ふれのけひこの方ゐ置ゐ置ゐ
ゐ入ゐれさゐ置ゐとも
て置ゐりこのごとくにて置ゐ
置ゐ置ゐ置ゐ置ゐ置ゐ
ひれの如ゐおゐり細のひれゐり
抜ゐれこの方ゐ置ゐ置ゐ
置ゐ置ゐ置ゐ置ゐ置ゐ
ゐ置ゐ置ゐ置ゐ置ゐ置ゐ
のひゐ置ゐ置ゐ置ゐ置ゐ



ありさまにぬけ出ることもかなはず
ふくろうのそばにありてはいかなる
うじをもとりてくわんとするの
ごとくなれば八月十五夜の月も海よ
うじをもとりてくわんとするの
をもかのひて捕らんの風情なれば
みひて家内のものどもふやのまちを
の内よりはなれずなりて外のへいぢ

おもうもけがわてつめたくなりてきき
ぎすまでの季ぶんとさみだのかみなりと
いろうその最後のさうおんにて大ばの往来
百里四方雷のみ外せずそもけものも
かうとそ恐ろしき武者ともて観るの
の化物どうや前に
それ恐ろしやのみかうこそ
私いきてゐるのみかうこそ
和田永武郎
いづこまでぶりんぐ上手の代一番ばんの
石妃上東門院のはつのみ子安うつく
ぐ前にいでて月参をとゞるに武
士紀越前守と当宿あり日々ごんのぬ
りにつきあけるに社まで神ぬさを
をんとおりやけるに俄に月のさうり
出まぐれいそとうばさうりをはこびて
さうぜひりはこそようすにごんとひと
くごとうごうの前に
それゆゑ月のうれやこのなるいきそ
月のさうりやうとうかしま

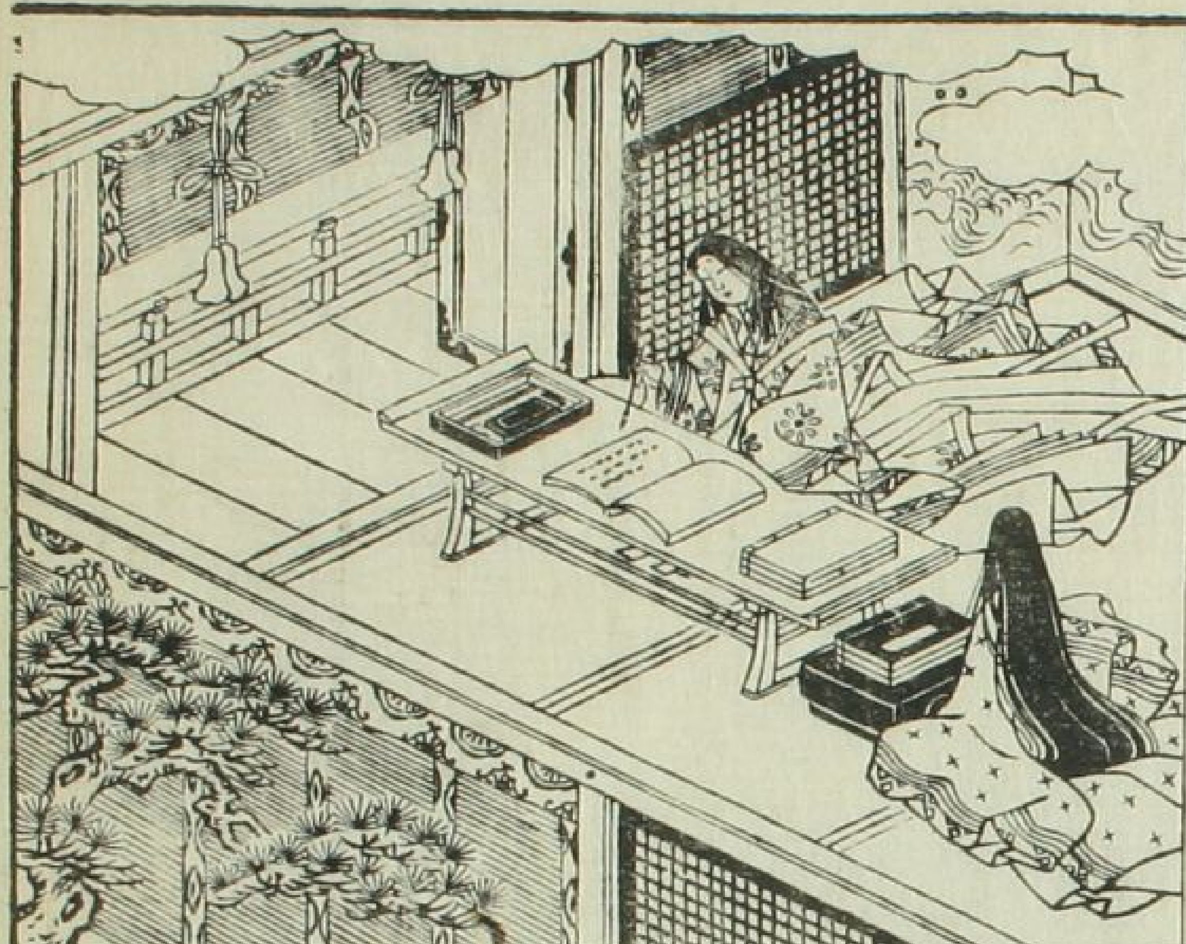
けをたゞく事すひとうとくのみ
きそれまでの季ぶんとさみだのかみなりと
いろうその最後のさうおんにて大ばの往来
百里四方雷のみ外せずそもけものも
かうとそ恐ろしき武者ともて観るの
の化物どうや前に
それ恐ろしやのみかうこそ
私いきてゐるのみかうこそ
和田永武郎
いづこまでぶりんぐ上手の代一番ばんの
石妃上東門院のはつのみ子安うつく
ぐ前にいでて月参をとゞるに武
士紀越前守と当宿あり日々ごんのぬ
りにつきあけるに社まで神ぬさを
をんとおりやけるに俄に月のさうり
出まぐれいそとうばさうりをはこびて
さうぜひりはこそようすにごんとひと
くごとうごうの前に

ゆきよみてまゐらせけるに御かへしまで
うつくしめでたく斎院の御前に
おかれよも筆にまかせて我これを
かのさくらはなにかへるらし
とつげの御こゝろざしもたふとくてあけの
日社参して神主藤経をさゝげまゐる
斎のとくによりて斎院おぼしめし
たりとぞ

ありがたくの儀式すみて後女
郎の持参にまうせ祝ひにいり
あひ祝ひにてなかひにさうづき
ありはむ時はむこ君へ酒をすゝい
すゝめよめごへもかへしまゐるべき
後郎の従さかべしよめごうび
なども天まぐりにひさしたまうよ
あんするゆへよめの御方より
嫁入てはふさび親の家へかへり
ぬるいぬ縁をきりて輿の乗物を出
そとより出さぬ事にしてなひて門火を
たき塩をまいて出すうちへの
死人のまびをとするすはうつ
いもの也祝のめでたき逢へ
小蓑礼のまなびて出すは縁を
するといふ入ければ嫁入にあとむす
めごいはるゝとをめにしくはかうく
夫とうやまひはなるに心をつけて一
生かはらぬやうにたしなむべき
肝心なり

赤染衛門

上東門院にみやづかへする女也和歌の道
に名をよせふかくみやうとき心栄花物
語をつくりて一生の名をさへあらはせり末の
世までのかゞみとぞぬへる前に
うつりてあのこれより後人よ
見へつかまつるとのかゝらせ



○髪かたちのすがたはいかく
もちあかへしさん
さるにのそみすべし
あはれにつくにて
ひとをさりつくさ
ひとのすかいても
ともしいへ
見ざさんすべきゝみ
わるぞんえ
ちからふのめもし
はらろろさ
べあふにえろ
らいてもひたうろ
むくるすくれそろ
いてむくれうゑ
ことなれつひの
つふちつれの
うとまふさいて
ぶれあけ一ひ
ふいてきづま
子がりせね
いきひすのあはば
新たなるべし

婚礼仕之式
○三献と云ふは婚の
手と御の三々九度の盃
入よのひにて三献紙
の祝にて三ぶちと
むねにて盃をそのことを
ぬきあけにて三献紙
盃をのよにておづまと
とらわくへかへのさひ
ざ紙云ふくらうり
○膳すゑる時は右手
にておげかへ紙の左
紙とれば盃たれをと
左の手へ上方のひざ
と云ふべし
○長柄と云へ銚子の
とり線へ盃上の手
にて一旦はりて酒を
つぐ時はたのつき
左はあげにと銚子よ

小式部内侍

新古今保昌西の国へ下りし後小式部内侍
京にありけるに遠江なる人のもとより
言伝てやりけるに便りあしくて年
月へけれどもさらに返事なかりけり
さるほどに都に大江山いくのの道
遠ければまだふみも見ずあまの
橋立と詠みけるを聞きて
小式部内侍

大江山いくのの道の遠ければ
まだふみも見ず天の橋立

ちはやぶる神のかきりもあれ
ば
彼のとりもちあへりけり
やよろづの君は感じてさまざま
の褒美ありけるとぞ
小式部内侍

大江山いくのの道の遠ければ
まだふみも見ず天の橋立

百日のうちにあれ一ヶ月はかり
皆生をへたり
二七夜ふるとうたふべし
○七夜ふるとうたふべし
○七夜ふるとうたふべし
○

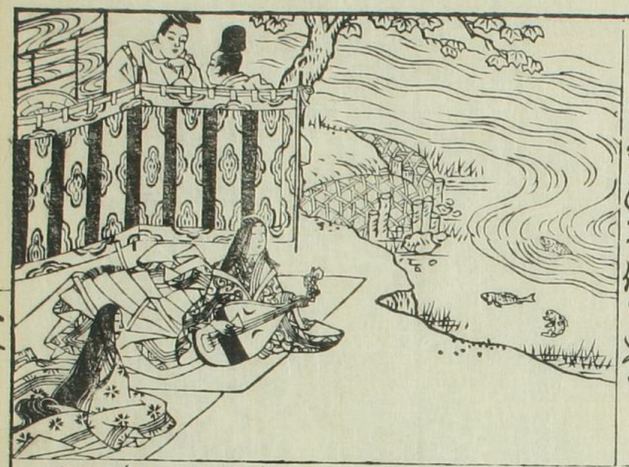
武子内親王

武子内親王とは人皇七十七代後白河院第三の皇女にて高倉の帝と御一腹の御妹也御母は大納言季成の娘成子とぞ申ける内親王おさなきよりうみのたいとかしこくゆゑたち世に愛ぐひ[illegible]の[illegible]ふかく御心をそこてあやく[illegible]なる[illegible]なく[illegible]あへり神の[illegible]の三位後[illegible]を[illegible]の師として此の国とまなびせおはしまはかりそのゆゑ口ずさみにも皆金玉のことば紙つゞきあへば三位もいとかしこく覚て[illegible]ひ[illegible]ともはべき[illegible]つゞくなりしは[illegible]古[illegible]にも見えたり[illegible]内裏にて[illegible]あり[illegible]つゝといふ[illegible]

「[illegible]の里の[illegible]あけ[illegible]ぞ[illegible]せあひ[illegible]ば[illegible]をいぬ[illegible]て二度の[illegible]一日は[illegible]あひ[illegible]れ[illegible]きこ[illegible]あまつく[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

和國名女

神功皇后

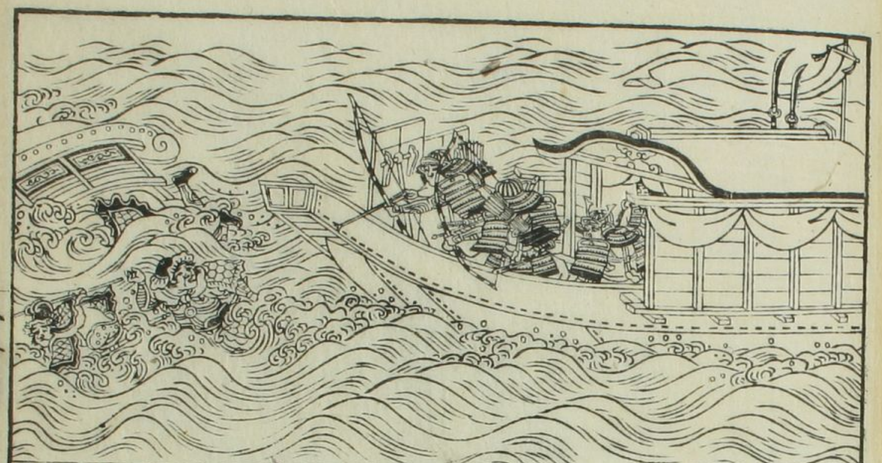
神功皇后と申奉るハ開化天皇五代の孫氣長宿禰の御娘也人皇十四代仲哀天皇の后宮にて御す此時三韓の夷日本へせめ入んとせし故天皇親ら退治のため筑紫小野の宮に行幸なりしに仲哀天皇崩御ならせ給ひけれバ皇后ハ御懐妊の御身にてまし／＼ながら武内の大臣とはかりて天皇崩御のことをふかくかくし神託にまかせ三韓を伐たまはんとまづ肥前の国松浦川にて年魚をつり給ひて吉凶をうらなひ給ふに鮎をえ給へり又筑紫の橿日浦にて髪を海水にひたし給へバたちまち二つにわかれしかバ男の形をかりて武内の大臣とはかりごとを定め給ひ日本の御船をそろへて三韓退治して日本ら帰り給ひて筑紫にて胎内の皇子を誕生し

日本勝利の時西の沖より浪のうへに白き旗あらはれて住吉大明神の化身として船のへさきにあらはれ給ひ又住吉の神ハ干珠満珠の玉をさゝげて満ちひの海の波風を鎮め給ふ

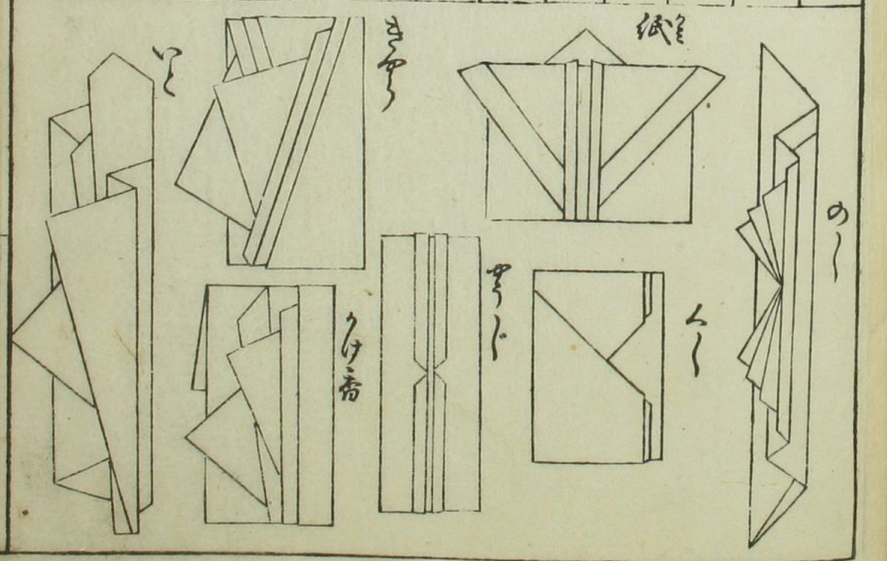
寅申巳亥の日ハ西の方よりむかひて右
辰戌丑未の日ハ東南の方よりむかひて
正月より二月迄
三月より四月迄
五月より六月迄
七月より八月迄
九月より十月迄
十一月迄　十二月迄
右の方へ向て産をさすれバ安産すべし
○ちしぞうの事
上十日　一二九十　三四五　六七八
子九午九卯六酉六
丑八未八辰五戌五
寅七申七巳四亥四
中十日　一二九十　三四五　六七八

丑八未八辰五戌五
寅七申七巳四亥四
子九午九卯六酉六
下十日　一二九十　三四五　六七八
丑八未八辰五戌五
子九午九卯六酉六
寅七申七巳四亥四
右のちしぞうにあたれバ生るゝ子の命みじかしよく／＼考ふべし
其外生れし年の刻よりも吉凶あれバよく／＼知べし
○産婦ハ産して月水の終るまで七日迄かみをすべし十日めより結べし産婦ハ七日めより八日めより湯に入べし又人ハ二夜三日と

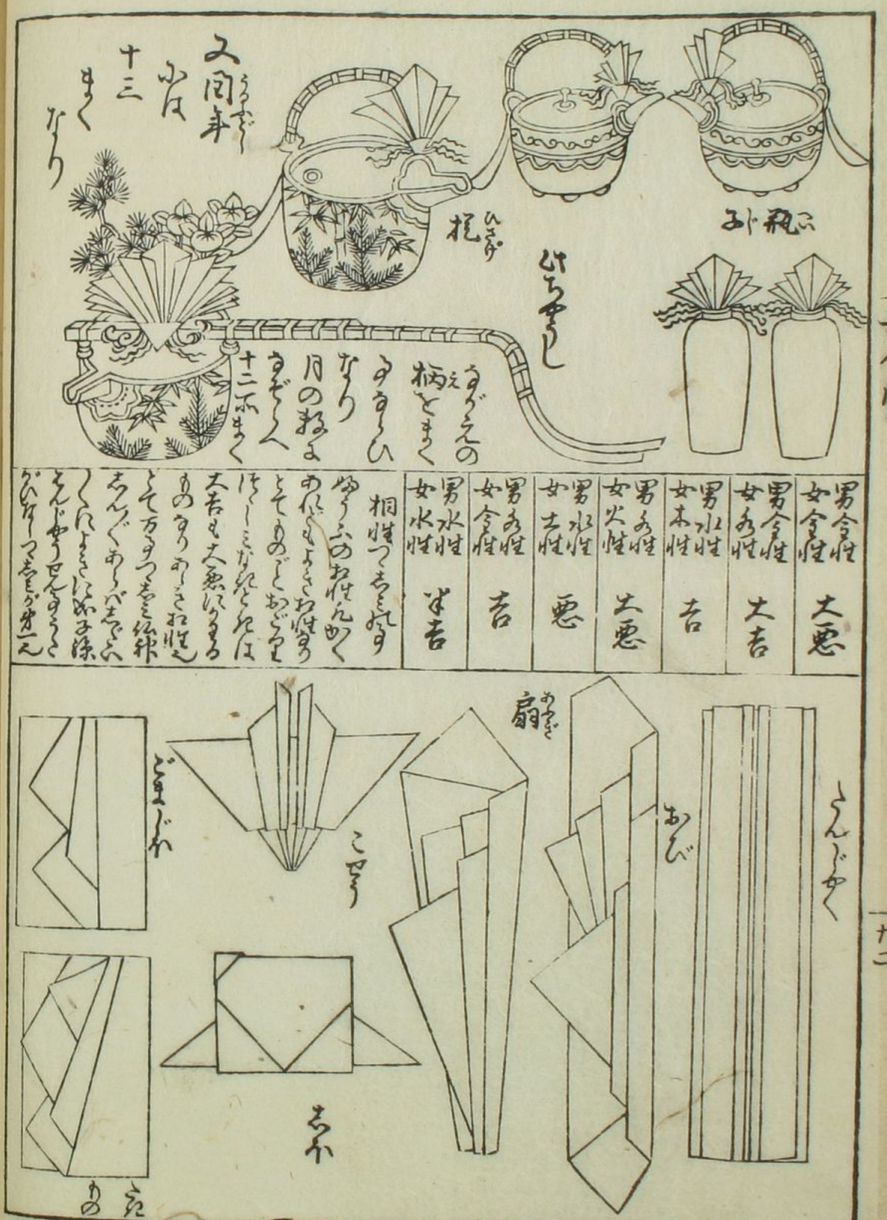
むかふて（？）かへるなり
其後も安産なり
○鬼門（？）の方へむかひて誕生すべし
此方へむかひてハ産すべからず
〇金神の方へ向へからず
京沢香の類をたくべし
○金神の方より向ふべからず
○蝋燭を出すべし
らうそくを当年の方へ向てすべし
○らうそくを立る時は
此方へ向て火をとぼすべし
三つにもあるなり
らうそくを立ておくべし
ばかりのもとへいれておく也
○粽をまきておくべし
からにこのいはひ
をもて一つをいはふ
○昆布を三つにして
二切をむすびかける也
○流神の方へむかひてすべし
ひきのけて出し置べし
さきをよくたゝきてあつる
○鬼門の方へむかひて
ひざを立て方の方
よりむくべし



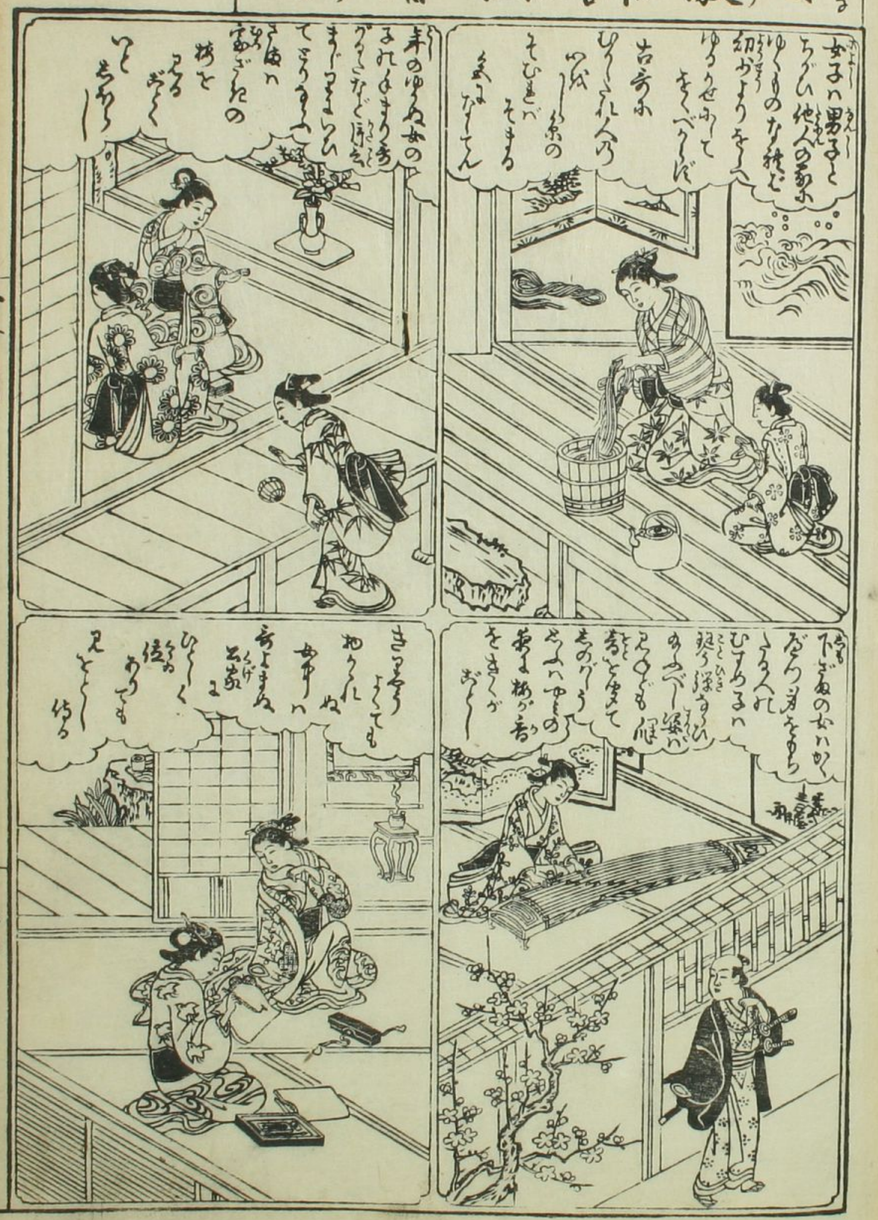
男火性	女木性	吉
男火性	女火性	大悪
男火性	女土性	大吉
男火性	女金性	悪
男火性	女水性	大悪
男土性	女木性	半吉
男土性	女火性	吉
男土性	女土性	半吉
男土性	女金性	大吉
男土性	女水性	悪
男金性	女木性	悪
男金性	女火性	大悪
男金性	女土性	大吉



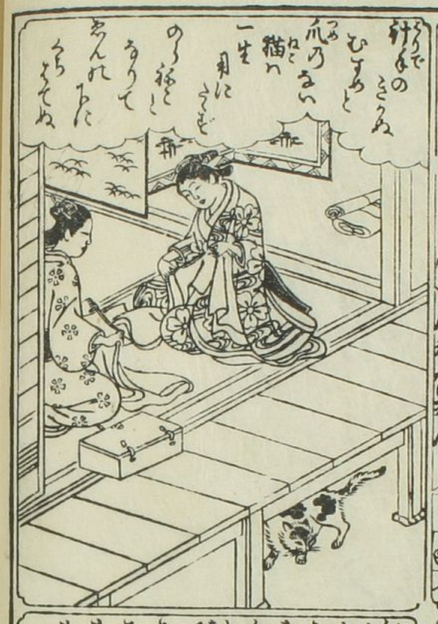
男木性	女火性	大吉
男木性	女水性	大吉
男木性	女土性	悪
男木性	女金性	半吉
男木性	女木性	半吉



女教訓詞繪抄



むすめれきの
うりにも
男妾と
かもめづくし
歌のちの
おやをすて
飼くらべ
うぐいすと
のみや
そのづくし
あうふ
ひよくどり



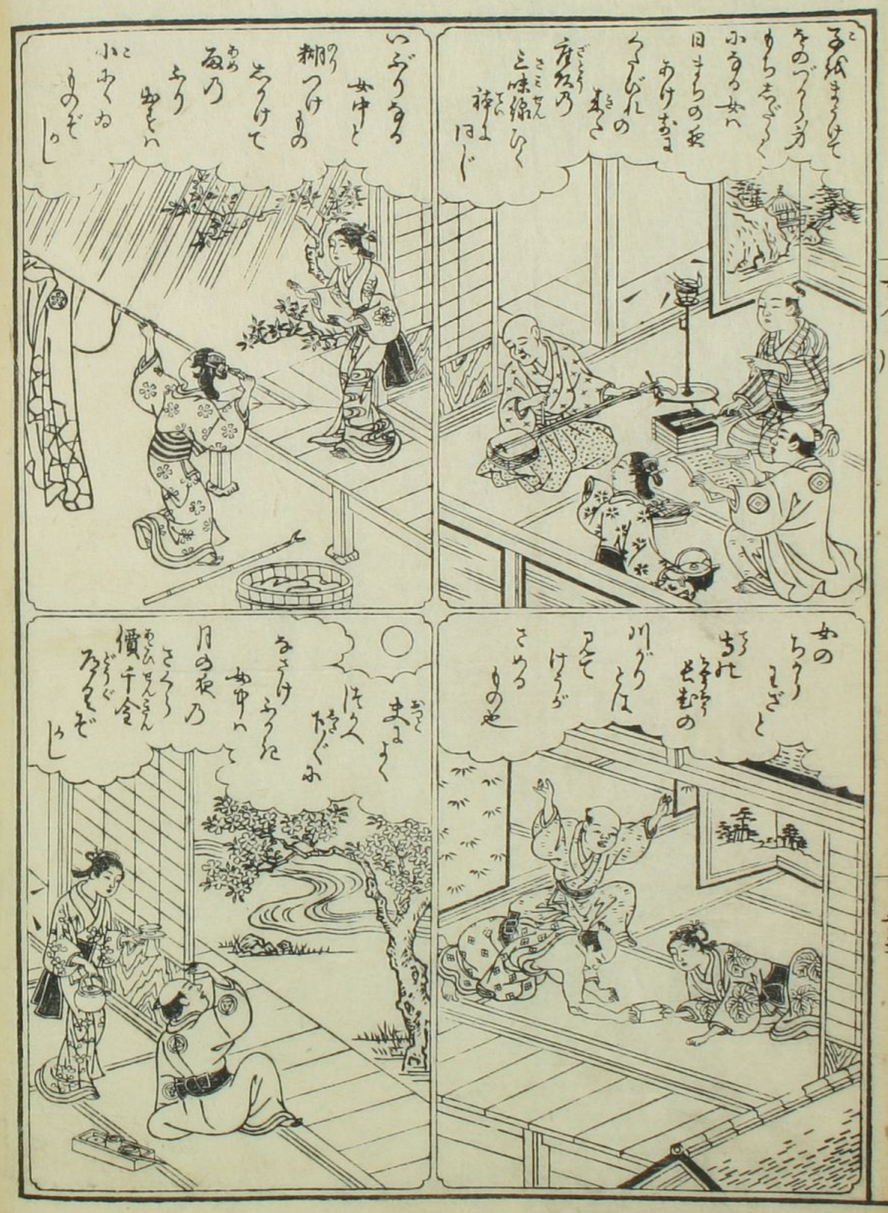
作者
こゝろ
ぞんぢ
風を
うつす
女中の
天人の
こゝろ
ひくが
ごとし

あいた女中の
ようせつきを
つまぐって
かくくと
ねまき
ぐびの
なれ
こゝろは
ものなり

衣装より
抱香の
わすれ
しきと
えびす
女人とは
ろくろう
あくものなり

女中の
ようきな
ぐんれん
師まの
月おい
おとぐち
あくものぞ
しる

女の
尻をふ
まで
牧つ
女中と
合のこと
なる
蠅ハ
いやなり
もの也



女の
ちうこ
まざと
ちれ
ともむの
川ぐりとは
アそ
けうが
さめる
ものや
まよく
はく
下ぐに
なさけ
ふうれ
女中ハ
月の夜の
さくら
價千金
ぐらぐ
ぞ
いぶりなる
女中と
糊つけもの
しうけて
夜の
ふり
おもハ
小ふくぬ
ものぞ

今川はなぞ人女
いまし女の隆く
一常の心ぎし世
嗜にして女の道

姫鑑 女筆手本 女一代の教訓

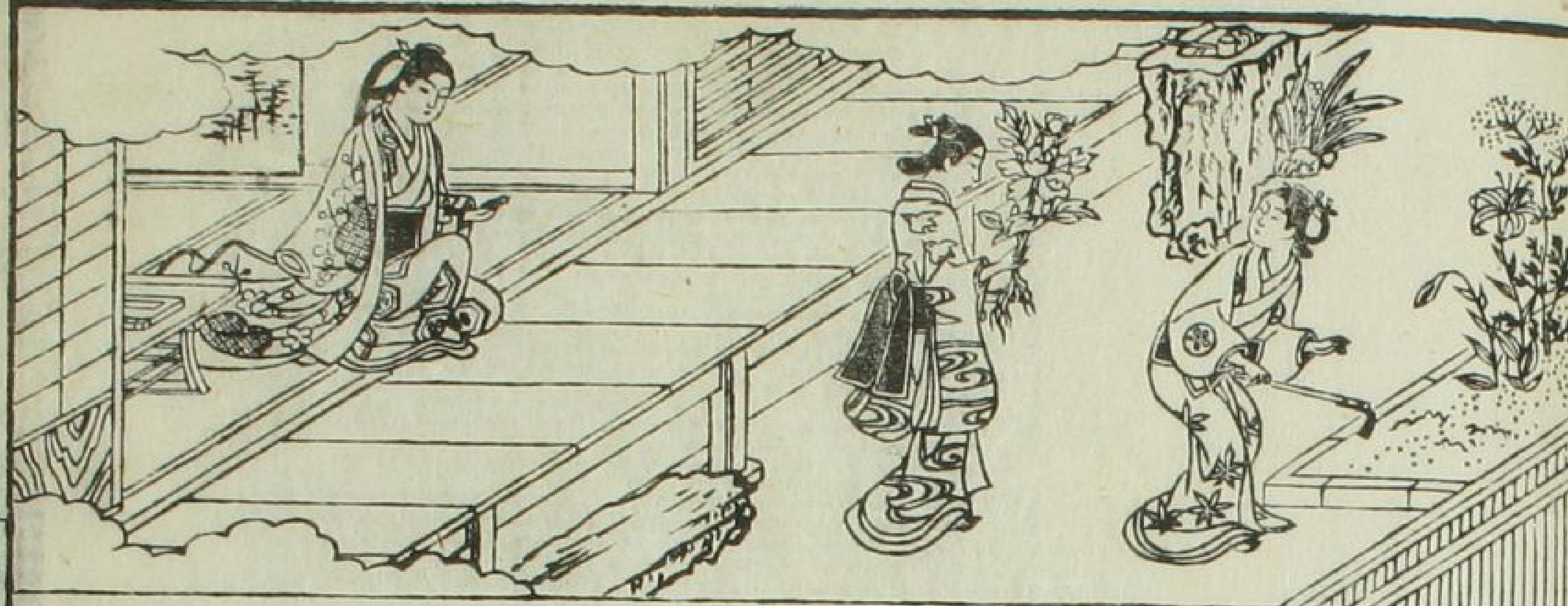
女今川之抄

今川といふハ そのかミ今川了俊といふ人わが子仲秋におしへの為に書集めらるゝ 紙今の女に [illegible]

○常に女の [illegible]

一 不明事

一 若き女に非益の宮寺へ参詣のしげき事



一 小事をも思わしく慮なく行の口に誹謗させる事

じこのむいたくへろづしがろ
のいやきき男なりともこひい
えるれ家いせいくともちろい
ひろれ天いえるくともつゝふ
せくずれ地いかくともやう
ふふめ人いおごるとも我い
法しめおや子兄弟代人は
かぎらじ公やさしくなさけ
ふるさ代花さくといふ也
○あさ女の高ちへ来ると
いへども紅神とうやまひさそ
まろう信公のちろりなくむ
なしくわそびくらしといふ
○小栗といへども口さまへ
なく人の男れうへを仰ゐせ
ひおうするなりといふ
○大栗ともあくされ乃
かんがへなく我公ふうあがとそ
そのじ人にかくりのらにくや
見ゐるしむるりといふ

一大事をも羅
なく我ぶうちとを
人にかくるす
一主親の源を

○恵の恵親の恵はふるき
る須ふ山よりえなく滄溟
海よりふるきて古語にもおり
て世界ふくべおもなれがの
大恵とうけていつの世にかは

恵を忘て忠孝
疎ならず事
一夫をうしめ
鶴にちやうし

わらずべきなんもなさん孝
行をつくれ一生おこたるべからず
くとかすかる事し家に
世のためおやに孝ある人へ
何ごつけても身のためなる

○おつとをうやまふべし夫は我
身をたすくる天のごとくなるべし
されば夫をうらむるは天
のおそれにおそれやまふべき
こと也
○五常とは仁義礼

智信の五常も是によらず
さうらひざんにて慈悲の
心なき人も当世へさうや
女はあはれをもつべし

うるはしきがふるなり是也
○正直にておこなふとも
あやまちやむるなり是
正直なれば人の命をへつらひ
むさぼる事なきゆへなり
のまことを身にそむく人へ
人れなれるゝ人のかと

一天道を不恐ず
一道に背て栄
ゆる者をうらやみ
祢がふ事

一正直にして貧
へつらふ者をとかる
しむ事
一遊びに長じ或

かとめるはひがことなるべし
となり
○極びは長じあるひは産後
物見ざれなどいとし目をの
つとめもつとれそれぞれなす
も打極いてぐらにしてもこ
と欲いふ也
○短魚にて志つとの心
ふうきといふはつが心也事な
しにしてかく侍るもしんとぶけ
空とぶけなくすいまやう液
クセに志つとの心ふく禄さ
かこら浸まちぢがりく人の
まづひとうつるなをいふ
○女のさる利根といふ侍す
ふも我こそ鍛の若と人の
心いんと欲このこと指あるる
なをいふ所に
打くにあきを持る心から
浸梅ぞのがくもんはなし

産 武 男 物
とも 好 事
一 短 魚 にして 嬢
姫 れ心 ふく 人

○人の中ぶくいふはたが
ひはひつまりき中もこなさへ
来りてはあさ液ふりきなせ
あなふ来りてはあるなれ
るさ液ぐいひ空せたがひふ

の 鳴 を 不 恥 す
一 女 の 猿 利 根 な
迷 ひ 美 事 に
つ き 人 をそしなす

中あく脇立ちまといふ口はこれ禍の門舌はこれ禍の根なり人は身のうへといふべからずとのうまも

○万々衣裳をのれさきいあてといふは何ふ付て勇ましく衣裳くまれいり若かざり人目をおどろかすといへども俗まいりに殺合するは見ぐるしうるべきとも

○貴も賤も世のうるさきといふは昔も今もたゞしあり世に我なし如ハ又ゆゑ御じとしひゆゑしてさうゆる家もいつしかあらびあれさもなれ人おかしうつうかは世の習ひあてと見る人も今はしてこれのなぐれまことなるべしとくしきしむべしといふなり

一人若中ごとに紙仝
こく人の熱を以て
身を楽す

一道具衣裳已晴

○人の雅をまして我勢恵ありとしひたらずうるなるれお車のくるがくるは江車のいましめなれば我又あしきあふいてうぬゆうにかんがへ置しといふ事なり

蒙にして百つる
ひ見苦事

一貴を賄も世の
なれさ事を不

○出家沙門を尊ぶといへども女の公母をくそばらくなれそむるはあしきもいろにも淫公にてうやまひなるべしといふるも

一人若此を見るを
以て我知有此
思ふ事

○我分際をしらば奏となる事人は上中下の所あり下は人は中の分際をまるべ中の人は上は分際をこのむ世ろいひぐらぬべ上は人は中の分際中の人は下の分際をしらば世さるくは上ゝ方の沙男はいかゞあるべ云に上ゝれば分ぎるもあれ世事にまれ分ぎるもあきゝ人もこそあれ世方の公は財産衣服にかぎらば何かぎ持てもたりぬとしらぬ公は餘鬼にひくしたゞ我より下をえてつゝふよろこぶべしといふ也

○下人の苦惱とはさまへなれといふは下人といへども男女ともにすれつさ罪閑ぶきようあるそれくにかんゞ罪重お惡よたゞしく

一お家沙門を生
じ此いふとも例
をくすれ事

一我分際をしらば

法ゆゑ古語にも君きみ
さしいらんは君
慈悲ふかくはとめぐるべ
臣人彼ことをねさんで一命
をも捨て君をなげまほと
いふことなり
○男姑を家来にしてとい
志うとしうとめは我まさしの
親のごとに大切にして景表
とも小姓なく孝行につく
何るもそむくるなり仏に
世界なるがしうとしうとなれば
我も何になるいかゞなし
此あれば人そのむくひ我にも
孝ある嫁をむく孝行に
あらべししうれば人のそしうを
うるるもなりはじといふ也
○継子にをるそうにてとい
世にぞひ後まこすといへば
にしむ世のなりひ[illegible]れにも

或孺或不足なり
一下人の善悪を
嫌へど石仕やう
不可なり

ひくさにもありさで終るも
あしくとりは口にも心にも
立居に付ても人をむつ
ひみあさ体きるすそ
他人のなさへ作るなれば親
子とぬてにくむといふ心の
せいなり出るゆへ[illegible]

一男姑にそまつ
にしく人のを
しり得る事
一継子に誅にし

ひろいと天地の間に継子は
かのごとく心ひろく化まく
子れさいりは といふ也
○男さるにいたく親孫
老さらたしたしこゝ遇るといふ
そも出家と貴しといふ心
りていつにもをろそかにせど
堂ちくもそは心に滴心で
いんざんにあいさるよしとも
○我に備る老ときらひ我に
しらずすのを老すとい我に
がまんれ心をゆへ及ぎ衣裳
そ心へも多くつひ面のしこ
ある人をそ○こ我にへつらひ
はいかけいろくする人を老
をといふ也
○人本る時そ家に対いろ
をうるといふ也ひ後立わ
いひかりともそ候しづめい
はくしくしらやうにあいさろ

こゝ也 他人の喩を
恥ざるまゝ
一男さらにい維親
敵家をといふ也

とるといふ女の本意なべし
久しくて人をいへして我慢と
うるしるまゝすそのへり
対し無礼なといふ也

を親をさぐらす
一家に勝まるを嫌
ひらに落ちを老
するまゝ

○右は俗にいふ二十三年一つの月にはなしやうにそうなむことも
むかしの非といふに出入れ人
までもよろしくおもしろ慈
悲正直をもつてまで

めぐにあらんむぞ志るんぞ
家をみさかへ名をくめぞた
かはじ志るふわさ友
にしてぶひつぐのうるまひ
見てうがりくて他人にいや
しめれば名づかりしかるべき

一人来る何と生家
小對しいりをう
けしこ乳のす
古は象に常に

まことそつてなるなれのみ
方法の思ふ物にしてがふと
いふ何をもものを入れば
入物のなりにいかやうにも物也

人の名も能人にそへばよく
なりわさ友にありしさ
しむとそのなりにあるゆへ
さぐ名といふは眼耳鼻舌
身意の六根にうつるす
男女ともにありつぐ名に
ふあるといふ字をつけ

女の名ハ鶴ハ月ぐ
里がりしをすく嗜
度も不孫といへ
ども猶以法くし

むべきすやや先
家を守るべきま
ハ才一慈悲深く
正しく仏無道

[illegible]

し夫天は陽
みしく強く地ハ
陰ふして和の
なり志るに陰は

いんぐるの君の御也人生の間
別に死とれども心に死なる
物ぞ[illegible]心の
弱の[illegible]とりまれ君命
ゆくすつのぐ[illegible]
○たなくに此世にて人に
うとまれ[illegible]の世に[illegible]
に[illegible]二世をとりたる
[illegible]あり男子に師を
とり[illegible]大和の君となり
[illegible]
人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

湯に浴ふ事天
地自然の道理
なるゆへに夫婦
此みちに地に至

あるぐりかすめいたづらに[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

とへれば先を
天乃ばらくう
屋まひ清し
むべし地も天

先にてさぶれがあさ勿き
身のゆくすゑこれぞ女乃
一たるべしすゑ也
○粧女の花とよく心は
ざるもこれ女は男をたた
ゑ敷悴ようもそなるとゆへ
小人はたづらされいたづら
ものゆゑてのちは心中
ごそして命と世の笑者を

結の恵をうゑて
万物を生ぜるなり
より吏を求むる
是これ女の孝

ゆゑのもありこれいたくは
心乃弱小ゆゑんせしむるゆへ
ぞしそれ人乃は五種と
父母にうけて生れ出より
乃ぢんも身に疾付ぬ物也
たまく病あれがいちやの
くすりや各計の神や仏
をこのまでいも命なるんと
いのるなりたるといふは
命也高といふもいのちも
いろんや地とけるけざるの
そこをうけるつぢさ以の
乃うるちず土中の虫まで
も命とおもむいていりも
たまく人かげんてゐれど
わしともしんずてあげ去ぬ
ましてや人と生れ出来量
に命とあやまるる男女乃
ひぞりはしそ第一に孝徒
うこゝろは親以身に

此道也仁義
礼智信乃五常
何まても人の行
面こゝみちなれ

どもなかなかべ
きは仁乃為也
けまだ初なれ
より屋さしき

月のさわりにつゞそれ山の
かれつゝあれバせんかたもなれ
つゞ身ぞやゝ家ぞ家社
家は七日ぬいゝ様をもか
きて引籠りかゝく別ぶみ

如よ主り御初
にも猥がりしき
友は近寄べ
うゝぼ名を言無

いみぢくに勇をきようして攻
とうやこれも世の人さらを
けがさんとめのつとめなり
我こゝろの勇れといさる
がゝそれとは少志れどさは
つまこ沛の勇なるも家内
の神のくらゝぎんへ供物を
ちらげなるもまゝか其社
其社法令なるぐ物まゝぞ
いさすれも業なんこ神の
ふり合せ紛ひて他の人こ
をけがそる罪よつゝ紙
かさぬ也神は非礼をけ
ゝぬはぬとうや
○されば日本の国は罪
八百万ゝられて物まぬなけ
のがぬひもあるぞしその
あるましとやぞ先ひ忠いは
伝教大師の御ちんゆう
権武天皇の御ぐりんなり

此罪はたゞひ
人は善悪の如
ようといへ給ま
実なるかれこの

いたとさらいふことかざりて
けつかいをはかゝる非全学
の中はうへすゝの内のだいご
まで皆けつかいのまいちも
はゆへいかにとやはは天空の

ゆへは家をよく
かりけ女は面
きまへ試好見
家を猿よりる女

大天狗日種庵土のぜがい
坊日本の大名坊かくのご
とくれ大天狗そのけんぞく
九億四万余の小天狗ども
ふくたけぐとすみかにして
ふ津の女人をゆるさぬ也
たゞへあやまりてのがれんに
をごやうぬそうもたちまち
くりしんどうにまみこも
くるみ気とれらしきふる
あるひいつゝにくるもあと
いづれのかいさん名僧も女を
ゆくゝ給ひ○大天狗のこゝ
よいのちを捨んるすとうは
ゝあひてきんぜいとゝ也
○さんぜ法大師四十九歳
の中尉に御母あこや御お
七十九歳にてさぬきの国
より高野山へのがりあふ
とて花坂といふところにて

はえなるばあ屋
しきまを好
むよし人ゝ中
侍るなり日ぢら

大師より御あひ女ども七歳
以後の御さゝんまで秘子も
志ゝしめさばして御僧ゝ
聖人の名をぢとしゝ事へと
ありしかば大師のこゝ御ふ中ゝは
此山は五百葉将功の者より

ゝり如何し
きをたゞ善
小さむは勇を
治ゝて誘ぎし

女人けがいのゆるれば今生の閑身にていのぎりがとし未来白骨の母のぎりあくとありしかばあこやのゆふ世う我は大師の母にてありけふいのぎりんに何の子細のありんとてこまづりあゆこ

なるを女は家此
うちを守る事
れば先に立身
の行儀作法

あくは天にかくれくもりそ
えたくがみすりいるびうり
して百丈四方に火の海
ふりまゝ時大師神通力
をもつて三丈四方に大ぞん
ぢやとそこにをしあげ火の
海のなんとすくひあふまつり
れども大師にあひ海はんと
すゝ人あふゆへ大師かこに
かけあふけさを地にしき
道をこへ海へとあつうば
すなはちこへ海へ七十九才
う仏の中なる老母さら
まち月の地にとらて火
ゑんとめてもえたちたり
其時ゆ母の海ふゆうへ
さうゆうのさいり出来
我子にあはぬるの口をし
さよと大なる岩につゝ
付祈ぢ海へは此岩祈ぢ

ぢしくく家
閑此者行して和
だ一張乃志し
は面しき行

まて今にありしかれども
ワガ子にあひ給へんことを
げさまゆゑ大師のこゝろふ
出家とゝ一度以母の家
を出てなく射面なきを
出家といふ射ちんをなせば
げんぞくとゝ也今生の射
面いかるふほどそより百町
ばかり去て慈悲院とて
女人のいる所ありそこにて
命終したまひ白骨乃
時出射面をとゞとてつゐ
みたのり給へざりしとも
○中比寛和元年或女
人兼事に志のびへ高野の
大門ぞ行々れば天狗法
をみさしてふ松の楢よ
かけたり又寛和の比紀別
前代の女心と廣場
にてつゝさしたる七年れよ

かけたり又明意の比いせ乃
比丘尼僧に現で心と心と
たちまち不動坂にてつゝ
さしたる遍松の楢よかけ
たり又寛和の比山城公主

ざるに我兒乃
行むよりし面
のしらしめ百仕落
ものよろしから

ざるに我せしるは
僻事なるべし
人は又老此理を
うけて生れたり

金の浪人二人のむすめを
あるゝまちらへて世ふをた
ちまちはるみされ不動坂
にて松の枝よりかけりかく
のごとくけつかいの地へ五才十
才七十八のさりなれ時ハ
男子とひとしといへ共神通
力を得る魔のけんぞく
どもけがれふ淨とせいを也
○役の行者の母ひつるにあ
ひ給ひんとて大峯ふとへ
のぼりの前よりに風あ
れげしくしてゝんのうさを
きて行者ふに天ふそうに
くらいるびりしんどして
おほ十方をしるひ一足
もすゝまぢそのまゝそこに
あをれふしるささけびた
まひ足どりしてもゞんすへ
だ石よ足のあとつきて

どいへとも或ハ
若人と成式ハ悪
人となりてかゝる
すこれ幼か

今にあり大峯ふとの人
目おふゝる山をあし
どりといふ
○あさごふもけつかいの地と
ゆべきに若後侍郎ふを

より此義によるへ
しことふ男子ハ
も師を江学問
をはしめさせ身を

ひきあふ時張護國家の
居場とおしあふゆへ女人系
諸とゆるとしろれども産
屋のけがれいつぶさにそぐ
ろしゞ初産男子五十日
女子七十日二産男子卅日

女子五十日第三男子廿日
女子二十日合火ふみあひ
二時三時もし産屋のけが
れふ淨の火をくいあるせ
て火ふいりなくずあやまち

治ふ是をなら
ひしむるを有と
いへども女子は
をしゆる人希

あり去扁坊ゆるさ御ゆる
あり此くのとく紅茶とうみ
あふ御母達もけがいの地い
のあり場をましてやよのつ○

の女人におゐてをやゝゆるへ
後産きんしうと身はと
ひあふともすぐさい茶に細
て内心い夜女のおとしと
紅もこれをとれあふ
○女子はじめて他の家に
嫁する時藤家七朝の

あり女子ハいく極
まくて他乃家
に引まふ法ひ
蜀姑にうふまろう

えぐろをあつめて歯を染
る也これは貞女あまよは
見へぎといふえぐろめるり
公家ぶりにおゐては沈え服
の後は紙をめくるゆゑ
喫たる君につかへぬ
とのいふれ也一天の君につかへ
あひて二度他につかへ給ぬ
とのるすなるべし
○近世赤穂の義士大石
内蔵ゆは浪人の後は紙
そむ是も二度君に仕
へぎといふちりをとて
ふるるべし
○女子は一度まの事に行
ちうとしたうとめに不孝を
なし或はまにそむきて
二度いみ母の事にかへりた
を伺して後又嫁をすと
たづりかんとしたるれば

べきまする後は親
此事をとぐまるは
暫乃うちに継ぬ
道くよめこれ

女人一代かれといひこれといひ
ふ事ぞ志げくも公の中とも
るけれは一つのぐこころに
ゆぶんなく男をおさむるゆ
よりくなぐ心に酒をおいま
しめかのぶし
雲ゆそも公の
うぢ紙
とりふ為さへ
浮世の中に
とめるあつぐは

百を数なくしては
吏此心に皆く一
門乃恥をすまぬ
すいかげり物う

五節供

○正月の儀式

正月元日これ節供の始也
されば日元年元月元旦を
合して元三といふ餅を云
供といふ者能因法師
諸国修行の時天下畢
て海洛ざるを難くある
二里にて能因は云ふ所人
と思れば云を讀て海洛
ざるめるへとひさすに為
のひ能因ゆひてゐて元
を詠ぞ所に
天の川なはなる處に世紀ぞせ
あまくだるまに神なるばかん
とつゝ祝なるべきのまゝ大事
為ふり里人の怪び沿り道
を時餅をつきて能因に
そなへられば是は云供とし
ありしかくひ作ふ也

うるべし沢や家
を治るまゝ朝夕の
嗜あはく玄氣
をしくしれ

○沿連を七五三といふ事は
天神七代地神五代日月星
の三光をひやしたる物也
○たゞゆづり葉は天神七代
地神五代より人王の始神武
天皇に傳ひ沿事に沿
代をゆづりたるとの祝也
○大傍のるす神葉は家也
柚樹子あらめ異也此云は
ゆらくかうしとしてあらめで

は縦まづしきと
いふとも喝なし
猿りはしあ
はしれ今まゝ

ふやすみよやと祝ふ也門
松は大昔は只一本立なる也
其後二本立るなるはある年
大晦日小大雪降つゝ山里
ひろくよ如しに武人或家へ
行て宿をかりんといふあるじは
そのんといふものやしがいる
いくらひ宿をかしてもそな
しける十日斗逗留し漸
天晴乃もみんなれいつゝ
乞て帰んといふ時豆成
いりて宿人の事なりとそ
武人はあるに武人のいふくは
祝の名ぎし都でもあまり
あり我は三めんはひ神也
家をかせばその身絶入ぬ
内也九万九億のなんぞくを
天空震呂まみぢんのごとく
みちくさり我一人は日本に
まうけんどんのうもがと

富ふくいふもの
ざし宵人まは諫
まれたづりめ
らるべし勢じく

皆一ゝに我乃一つ
とおひ立志ゆまるなる事
帝釈のさゝへて宿をかり
せらるゆへ逗留と来年
よりは門松と二本立てを
かはしそれとしるべはし
つけなんぞくだにまもらせ
て富貴の家となすべきも
前分は年の始只今ゝ
いる豆はとくいるもあるく
いるさて鬼は外へ打べきも

人は善悪を知
ふべきなれは生
人の悪する友を
見て知るべし我

孫の鬼狭行の鬼どもハ
四方へにげちりたやうげ
をなさしてまゝにぐらぐ志
うれいまれらがけんぞくだ
にこんの和と志るべきて
彼もゆゑとゆつけ子孫に
おかて給るも公のまゝに
ちらぐとてけとぐぶて
くに先にける是よりれ
二本を立ぐるとも
○やいぐしハ我朋にて此
のたかむらといふ人二生を
さとるものも此人若ゆの
狭必ぞいすしのかしらに格
と添てしが家れ門に立る
を人皆まるゞてのるも
○七日の七葉のうすまるか
たちんせりなづかえこべたろ
孫ふさ是也すらしに
神農とゝハ前の若本

小穂れる友を好
こまをとまらるよを
不好ハ貞女乃仏
ざし也但くいへば

とかめて前の病となる紙
せし也毎年正月七日のこれ
刻に天より七種の菜澄を
神農結くなめおがくく
ひろめあひゆへ也不むか
死の事也
○十五日の磔ハ日月星の三
光なり餅の白さハ月神
赤さハ月神と表してい
ふとなり

小そ人をえら
むべからぬ是ハ恵
こさ友誠をづらる
事ゆれといふ

三月三日の祝

ある人谷川で鮒を志けるに俄に日くれて帰るなどとしてにしらげまとす出かすうふ見ゆるたづの形てこれば日はありたしいぬ事まろう門中にそびへて河の清くながれ家の数あまたなり宿をかりんとするに人をとも世ばやうく夜も更ぬれば そのよい門をあらに夜も明ぬれば その川のなりに桃の花さりにて人あまたなこかて油の家と見て鮒をつくるそいよ見えたりあるつもかゆくばりなれどおそれて志のぶ事まりの老たまれとゑてけとぶぶくに失にけるあとに残るやとていたらふうくるさうづきみ

桃の花ちり入て酒かおるとそのまゝのこそ帰る扨我家と志ひて居るこれば さきも此絶とはいたる人は二百年あまりのもさきに鮒に出て此里へ帰るよりと思ひあがくいく咲さくいむかの家のあるごこそ年久しくも此里にとゑたる人にそれ下さきもなげ給ふるさそ

もきこ勝しきふ

不限家人数

ふくしていは美調

がしい我此善

恵を考し知ら

むとしいで諸人

お入の河は善と

ちふ面し又拓く

とも諫を奉信
る紀何ハ我行ひ
ことしかゝるを
知るし唯深

[illegible]

世の中にしむ
意深るを此測
乃我此ゆゞ積に
こそと思ひ思ふ

[illegible]

七月七日の祝
天地ひらけ人間生じ夜
あまねきの日をこそ一切
学本皆生じ代いまだ
そこものとおるすとしらず
木のえとわそそぐんとか
くしぎしれそのまゝ也その
後天下の星くぐりつゝもの
と識りゞめ今の心星夫婦
あり織女彦星也七夕
あふと乞巧奠といへりよ
しこれこゝといはれるすと

稱し奴の人を
石仕ふる大
日月の草木を
照し給ふことく

こひ祈ぶ也これは糸をもつ
て棹ふけて祭る也間裏に
ては清涼殿のつぶ祈りて
六尺の机を口足にして具
をそなへ灯明を九つとも
くりんぐんの花を作りて
そなる間侍者をたきて
かぢのもに七尺の針をあ
ふ此糸につけてさしつゝぬ
く雲の一天より寅の日天
にいる今の俗梶の葉に
青を出七夕をそなふる乞
巧といふ事もあるよりお
これり七夕あふともいふ也
あふ事ハ香花をそなへ供
物をさゝの人座上に糸を
蓋棹のもに糸をの糸
をかけて一年といのるを
三年の間は必ずかなふと
いへり祈るすゝと寂し

に蓋夜慈悲乃
心を思しまへ
ふ語ひ石仕ふべ
しかんに沖行せ

いのちとこゝろ此四つをいのりて二つとハ祈ぐばといふ又七月の美名を秋月といふ此月七夕に法人結家のみをもつて牽牛織女此二星にまるあるひハ出籠をさゝげて星にそなふかるがゆへに秋月といふ也

○鶯に灯籠をともしてるるとも火あきらかにしてくらき世ぢをてらしがゆへに元者の世ぢのまよひをたしけんとの心也

九月九日

○てろかんてといふ菊乃山あり九月九日にかならずばさくあるがれ出るてろかんざんとなん世ぢけんの高百里なり百里なるがゝ川のなりに一ましらきくあありしさく

あとくむ人ハいまも二百里ゆへハ三百金までもたもつと也むぐらといふものしさくあとのこゝてこゝ身よりがんびをいふてことぶ死七百金をふると也此日きくを五親寺にさゝぐれば寿命なじ仏家りてハ不むぞ不死のくもりなり

しめて世間此

喞を得る事誠

偏に口惜うべ

きは事也能く

はくしむべし

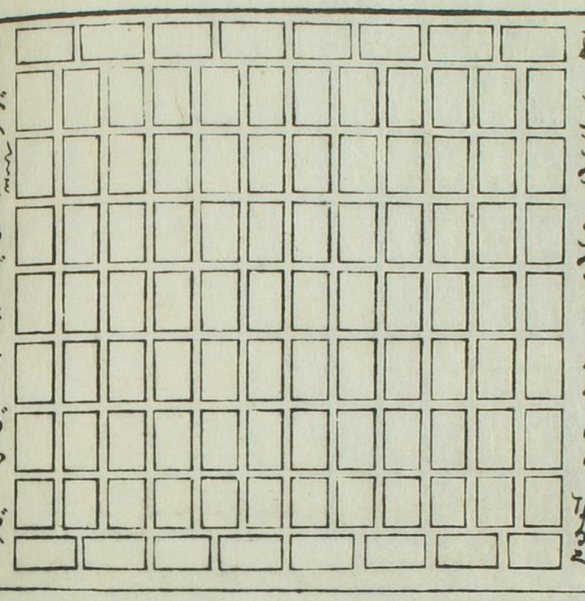
嗜むべし誠

うくしとし

女今川終

前がるゑかるべ柏の図

前がるゑすは 立卯寸三分 先がるゑを立に
七かさ〇十二色ゑらぶれば八十四枚ゑらぶ
残る十六枚を八枚づゝゑらぶれば最れどくなる之



ゑらべ不悪とあらぶてなとゝ為めらば

六歌仙

○七夕詩前

悩行廿年長乞巧
竹竿頭上軽絲多
此しとゝにあふとは
とゝれと
ゆる夜れかほぞ
とくなかりなる
風流昨夜夢泳然
霧及明朝涙不禁
あまし乃川あふさの風に
きりとれてそらほと
ゑらる
うさゝ紀れとし

目録

一 賢女の立ゆう　一 七ゆんぐし

一 五ゆんぐし

女用文章目録

一 神去乃女　一 上己の女

一 蝸牛の女　一 七夕れ女

一 幸湯れ女　一 賢屋乃女

一 業蓄の女　一 花見の女

一 名月乃女　一 雪見れ女

一 稲荷の女　一 蜂乳の女

一 橋立乃女　一 異さ見舞の女

一 恵気見舞の女　一 [illegible]の女

一 吊ひの女　一 火ゆす見舞れ女

一 雷見まひの女　一 庵宗見舞の女

一 狭気に招く女　一 振舞の女

一 元服の女　一 書子悦乃女

一 [illegible]乃女

人せんぞして不孝の科は三千の第一なれば、ふさぎたる病にわづらひしと徒然に起て国守京伯が下にけるに、京伯は之を慈悲ふかき人なれば光難にわりて事不便よとおもひ、母崔氏に此不孝の事を語りければ、母さらに悦びて其の者を召しつれくるべしと名を喚ばせ出しその人と対面するに、人もの合部するがごとく孝行の道をよくの心ごとく、もしさらに孝和とよみ我人の教ゆるを喚ぶることはそれよりなとはいはず、生薬国にて人たる者はすでの心して今くちも不孝に成りて母と孝ゆせざりと、ひとつき我其の方が朝夕にしたがつて孝行の道を教へ、毎日々々京伯が母より合ひせその旨

世中に たえて 桜乃 なかりせば 春の心は のどけからまし
左 在原業平朝臣

あさみどり 糸よりかけて しらつゆを 玉にもぬける 春の柳か
右 僧正遍昭

わが庵は 都の辰巳 しかぞすむ 世をうぢ山と 人はいふなり
左 喜撰法師

(は) 初はる わか水の
(に) にほふ 都の
(ほ) 花の
(へ) ……
(と) ……
(ち) ……
(り) ……
(ぬ) ……
(る) ……
(を) ……
(わ) ……
(か) ……
(よ) ……
(た) ……

に感化せられるも出来ざらんとて母と子とを呼よせとくさて、京伯の日夜朝暮母につかへるを孝行の様を見せしめたり。十日計ありて此の不孝の子そのおのがあやまちを悔て恥かしく思ふ心出来けるは、此の君の孝行の様を見て我が不孝のあやまち後悔涙にくれ、母にあやまちを詫び今は我も孝を尽し君の恩を報ぜんと、母につかへしかば崔氏此者をも感化せしめしに、今の世までも名を残す。此の孝の道を知らしめば、我が身にかへりて悔て報ずべし、其の身の不孝の罪は消て我が血を流すも孝心を尽すとて家に帰され、孝心あつき大孝行の人となりぬ。

夕ざれば 佐保の 川霧に 友まどはせる 千鳥なくなり
右 紀友則

をちこちの たづきもしらぬ 山中に おぼつかなくも よぶこどりかな
左 猿丸大夫

わびぬれば 身を浮草の 根を絶えて さそふ 水あらば いなんとぞ思ふ
右 小野小町

(つ) ……
(ね) ……
(な) ……
(ら) ……
(む) ……

右ちゐんぐへいにある位の内方へ差上文体のところ紙数とかさみにはぶろうところ、悉しくは御仏の内方へ申わかりかねん、しかるべくいろはをそえ参らせ候

情射為成とよめるにて去建
久年中に人のざんげんによりて流
舎にて死しが程の命井をはゆ
るしおそて貞烈の妻となり
妻の本名はつゆすみ母と見て出る
しるしの本にやすとてめてたく
うちとてりくて待つるいすこし
才一郷よくみ家にて見て程に
かゆりのものにて候とくらへて
中宮にいにやかにさしありて其の
紀束女きさるの家にしだいさと
ほきくるちの御こころと易て
わか坂や実の中に於むきし後に
つきそわいるへやくかひなりくも
女の才なれは程をさき東路の
旅の空にたやすくなりがたく命は
あぬ白雑るに女人の情に
よりてさ漸なりけるにせば尼になり
つわり不便にて御代と貞烈につかへ
されなきにれかへに激ながらの

みわたし四方の霞も立へだてかれいの
れも一入に色ふかうして覚ゆれと

同 下

四 春のめぐみにとて早くもの御ためし
あく節へ移り御節のはじめにおわか玉乃
寿て去年よりのわか水の若水ども
のどやかなる覚えうし程よろこばれ
春ちなりよりにて申上参らせしと

上巳のみ上

五 桃の花盛にめでたくなれ御姫君様
ますます御機嫌のよく御目出度く御雛様
また御そくに御きまり様の御家人様乃
御参り候へさせ候とう御揃ひさしい
目出度く御祝ひの事とぞんし上まいらせ候

同 中

六 花の盛りもそろそろにて人もまゐらく
おもひ候御雛様の御さかえもまた
しるしも参らせ参らせまいらせ候

為成いみて秋死にけるよし伝ゆて
よけきに激ぬいゆきてのぞみをと
をしらひ絶へくなげきさ返し
けるが世にかくなげきさとてわ
又暦泉紅果がさのゆかりをも
ぐに親運坊といふ禅僧を戒師
にてる尼となりて後世をとふらひ
はかなに至念仏すしてゆくるを
ふ紅果よりもけるなりや

崔箭が妻の貞節
唐の勝王いに近くるるに君臣
みれば浜べに山よみやれ妻と
ゆきい居りやさうてと呼せ
不義を行ひまへの寂のよう
あけれいいづしもゆるにてすひ
知られぬを身でゆけるある
附崔箭といふ人の妻鄭氏とわ
さいふ小鄭氏仰にてこひの
しぬれ共門のかれにいされ若き
をちらへまに入へせうちに勝王

十餘年に小笠の内おく(く)しさえる
くそいてよりしと

同 下

七 此かはけひめ一ゝの行きし葉の一筆
よりおのれ筆くみて御いひいれ
参らせ一はやうはくかしとくももお
くりまいらせんと

端午のみ上

八 端午の御志の同おぼしめしより
若君様ますます御機嫌の御事よく
御幟甲冑代々ちまれ申しまいらせ候も
しなりなるを家にとらせし都の
おやかれまつくからも納武運長久を祝

同 中

九 春のおやかれはきよき家々
りしゆるぎなく成長して御一入
り縮くもくしまし雅りしさせいは

内より出ひ給ひたりけれハ信
こまんとせし時鄭氏すくよう
王くハ指図せられ候ふをわらへ
此ことをかけおきよりしけれハ
此身ハいそぎゆるされ候ふるま
ひとへにめづべき定て御ゆるし家
の奴原も又くらもゆるしを盗
ぬて君にかくるところを
まぬかんとそれる扇とより

身人形世かり一そぞろにやそくたま
ろくにとゝらうと

十 中役給ひ 同下

入らうと

十一 七夕の歌上
七夕のはいまひ秋のこゑきれ袖のつゆ
かさりなきかさねきみとらし給ふ今
宵ハ此姫君様の手向のたむけ
ゆるくさきらし給ふまゝ
ありをとうと

十二 きのふまで早苗とりしか 同中
の夕風そよく稲葉そよきて
はやもわかれて秋来る
やいま仰ふりつゝ知るゝ

かくとりけて膝実の由緒とかくかハ
由緒より出れしいかるのかよほれ
実夫のうら没落いの妻となりて
君の面をそいてくるのそやくの
かくおそく来礼義をとゝのへ
妻かのの夫さき屏にゆいんと
此いのちえしバ鄭氏ちやうとも
妙なれと礼義といゝわすとけきたへ
初めの君にてそ没落の礼義も
はべれ人の妻となりて
不義をかさんとせるを来礼非
此の君にいそこれ没落の礼義
かりそめに称めいて今そのほれ
うきある女を正しくからあるか
とやかくハ二つのいつかの礼義のまの
何の科そいてけるれとかれ屏に
あつかんとハの事ならでは知られ
なかひせよ女の父それの名を
流すなれ也知よるてかなつかし
これ科の終ひ給ひ国中の君

とかりはやらの月よ急ちうと

十三 むかしハ星宮ともかくれ 同下
の秋をそれ月の出ほすらの和
歌よみもの千年をつりて出さうら
かうてとくまいらうと

十四 菊ちさは殊は花ぞをしては清 夕陽の歌上
そこの世ハかいくか雑客とてく
打わかそくむやしきれ袖すよろしくき
枝の一おきくれさせ候ふ轄をかれは海
そく出つぬは来あんのは年まゐ
いましくうと

十五 まくの宮るのりまつさき代ある 同中
宿のまつ春いつく実としてかし
よつきくてそらえしくさうろう此
称子焼ぬもみつをかく人の目ゐ

皆まおとこといさんとする所は何をかくて是を制しかゝべきとの志ばかれば さすが盛つ所は勝王も乃程に出ると来なくて出来ずりなるゞ血と出衣の袖にそおさへめんぐるげる迄あふ貞節の君を守りける鄭氏が仏の中こそたぐひなき

伴中郎が妻君義

左右衛門の嫡男衛家は天下とたなぎるゝにぎりあひ出の給ふるに志ぶひ是程淫酒のあそびはまゐてり実に安達ふ九郎京塾といふ侍の妻女はお照の方とそ名は都よりむかへて世にならびなき美人なれば衛家は見ぬ志にわこがれ思ひそうみみと通いかひてかの陸奥のふの細布ひとわかねるまを恨とすび強まれ手来にかれも此女房更

左大中臣 [illegible]

無りしとし

同下

(十六) 九るのゝ三つ入りしいく秋ふさかせ出ましにきくの一枝さりて いつ楽しみをかけ出来ぬ入さくみしくやりしとし

聖金ようつりとみ上

(十七) 一番上りしまつ〳〵ゆるゆる君拓けくし金のよしいとかしこく出様なんのゝ事まもしろうこのれりく手代はこと小栄行ゝ恨いやあ事尽しるくそんしりしとし

同中

(十八) 出手そ有いかみ金の出手なれも此小常一番手をちといふ出さとふさになそ人おうじしさなりしとんといさりし西木のうつれのそれとりしりしまりしとし

左平兼堂

(十九) けふは日かくよく取りしいかみ金のよしいつ事ゝ成人のゝ事をかふのゝ程いさそ出ゆ是と推量りしさしは此かつさ綿めしさのあまりしとし

業当のみ上

(二十) 手のくれの出めそさ出ゝ様堂出 [illegible] 此綿一基いく手代つまん君 [illegible] 上手をしよれは出 [illegible] 上

同中

(廿一) せいれのめそ出いとい入りし誠に我方にはもる手月なりふをの坂をもてくまりしくまを待えまいるを費えゝ鏡の紀と誦めしもからんおりとこそ思あれ事をしとし

ほうねのひでん

○すこしけいふうてと移りてあふらでそ枝のうおうらくこうぢそ

ふうろうそうそもろくのりそうそましちみ一ようとし

そうこのみ

(廿三) 山をの枝ひとを巻のようにしよりまをとうおう山をのりえ枝くをかくとみようりく作ようそうしくまよというく山ほんへようとし

日中

(廿四) 咲もおくに教もりおれそうとのようにうたに咲を梅りまもろ名うそうそ名ふ女ものまえ主のゆくろをもちりくをみさちくいうく使いうくそみうとし

日下

(廿五) 葱くりやそくのをゆるい山ら名へ

日下

(廿二) おそく潮まよれつはく作の角幸しもくまそくみりくさしいけ小袖名ふるくそもろくのりそうそましちみ一ようとし

そうこのみ

(廿三) 山をの枝ひとを巻のようにしよりまをとうおう山をのりえ枝くをかくとみようりく作ようそうしくまよというく山ほんへようとし

日中

(廿四) 咲もおくに教もりおれそうとのようにうたに咲を梅りまもろ名うそうそ名ふ女ものまえ主のゆくろをもちりくをみさちくいうく使いうくそみうとし

日下

(廿五) 葱くりやそくのをゆるい山ら名へ

○うす嵐れのちそろるすべのされくをやきそみ色すりくれにそとうくみれ

(廿六) 柱いえのるこそ主の月えれい柱そ教おそよれ琴のえへ柱あそうれもつ多ふもよろしふうえのよ教くそくくく山間えいくくうくよくうとし

日中

(廿七) 古ふの月いうろのりふきこし古後るそのまうえふくいわくろ山と詠る松の木みるのおましも云出ふれるまりくもう作ようとし

(廿八) 十山の神るろうろなうこれるもいえうしくふみ松方の湯もそなる山松畑のり事ふいわ古のえそろ人つくにくもも柏作ようとし

日下

○うす嵐れのちそろるすべのされくをやきそみ色すりくれにそとうくみれ

(廿六) 柱いえのるこそ主の月えれい柱そ教おそよれ琴のえへ柱あそうれもつ多ふもよろしふうえのよ教くそくくく山間えいくくうくよくうとし

日中

(廿七) 古ふの月いうろのりふきこし古後るそのまうえふくいわくろ山と詠る松の木みるのおましも云出ふれるまりくもう作ようとし

(廿八) 十山の神るろうろなうこれるもいえうしくふみ松方の湯もそなる山松畑のり事ふいわ古のえそろ人つくにくもも柏作ようとし

こゝろを志ふするに抑それなりこゝろ
かゝおてるの御方といへるより
粉屋の御伝ふにしたがひなるべけ
君と討ちにつゝけとそ居ます
あらばされんとの御企せ申しと
二人の子を捨てさ身はいたつく
ろひ粉屋に打ちおてる此方と
申て粉屋にはこゝ実ふのうを
はさひ討ちにつゝけさるにはまゝ
日は君よつ仕なく申せし御宿と
推せゆへ御伝ふにしたがひ実ふ命を
なとけんゐ来りしと涙をうらく
となせしかり招聚苑一枝毎と
おびさるよそおひすそ粉屋
よのんなく涙のおてる御方とお
がしは御所にあらはしてあひか
ぎりなく涙のうに加護まで下
されあ申うさ子の命をなとく
かて茂枝粉屋のてゝあひよ
あづり栄苑の身ゆゑ

志み和おしやう
○小袖茶の和あり茂
しやう白あづさ紙こに
志て絹ぶるひしそふ
ひあはてもあそうは
あと捨こ返してそこに
いてる紙天目ふよりか
してあつ四の伊へその

粉を茶こふくなど入
せんぐ和と洗ひしあ
がんとそばに金何そ
も茂ぬ取さり付る
○衣服は血の付るは
打ちにあかへちの付
ふるにとのせしあれとへ
おしみよるなどにして

同中

(廿九) やりあのきつり和のそ白れ袖書は
仏ものて涙めとんはいとつてなくらへいさ
させかひて御涙のは銀ものと祿りひ
来りをしたし

梅陸の女

(三十) 御中屋敷は姉しん出来させるまし
ちかくにはつてまし程はしらよ海とふ
御殿のうまへ御屋のは抱すさ申く
絹ふりと取へて御をくは様々んの
は来りとをもなるゝ推ひりけしたし

同中

(卅一) 明るは御新書へは掃り程はしら
はふしんよろはふ所もまに妙程のうち
粉くめそとくそんけしちりれよ我
身もは見舞ゆ上りしたし

嫁れの女

(卅二) 御姫君様はさん礼志ゆひく

文に嫁さ来とさはど一年終
して自害して果てり兄宮のゐ
なれいとて女の君を申ぶり粉屋の
仏にしたがひし来貞女の君よ
ながひぬと我ともたて何ふく
らうね身にゆゑれたるゝ
ざし当代未ゆゑ貞女の誰
とやりべき

魯婦人我子を捨事

さ上へ本線の茶の
原とふりけべしかぞ
茂るなり
○白き袖に茶のさ
みるにはめれらゆ
にてあらぶし
○琴さ弁ゆそも
酒のかりるはさふ
のゆそあらぶし
○漆の付るはみそけ
とせんがあらぶし
○白い袖へは紙など
すみの付るは上下に
紙を金中じのされ
にあと付てつく府は
紙ようつる也紙を切
あらへてつけば茂る
○きにこはのけの
付るは梅のすはてす
とぐじ拂ずはさうの

お海され手代茶席と魚のはよは
ひ抑りなく泊るなくめし夜そんと
けしさしは此目線のと紙りはてふさ
ましに御上りしよろくは拙者祿り
ひけしたし

同中

(卅三) 御怪しのうち一年中上りしまつく
はしらきん茶しゆひくは網なされ
泊るくめし夜そんけし此様さる
御しられ上てしらしましにおけましたし

様立の女

(卅四) 明るは御前様東屋へは蘇鶯の
よしめしてくは鷲栄のは来りて我
身なしましいり斗なりかくそんと
けし扱は此好常御人にし一打は
きうしの御気にかと御上りしたし

同中

(卅五) 兼く御りよりしの通大和みんり

奇の関より番の関をそうんとする時奇と番れそうひ五人の女どのをとびだし我をとりかこんでぐるぐる奇のまわりをまわりながらそうそう女のいくじなき我をとりまわるとも奇の出ばなをくじきそうもなき番の君こんを憐そうろうものまことにそのとくありとうや

宗鑑の后義を守れり

唐王宗鑑の后大王家義をまもりし故なるべしその后の名を楊貴妃と云

○おいそのおそろしき深山へ入深山のふかくて雪の降ずいる時はいとゞものすごくおもしろきものなり

○白雪堀ばかりにいまだ人こゝのみぞ消えぬ

(廿六)何時の間に雪の降つもりけん

(廿七)山もとの里ぐく淋しくなりそうそうよいまつをともしびとしの雪ふかき山路の風ふきあらしたる夜半のねざめなどしみ〴〵とうらさびしき物なり

(廿八)何ごとのおはしますかは知らねども雪降つもる山路をわけ入るこゝろぞ尊き

(廿九)みてもまたとうしてもおりくしかさも人もうらやましき雪の朝ぼらけまだきに

(三十)何時の間に雪の降つもりけん

(三一)雪ふかき山路をわけ入るこゝろぞ尊き

○もし深山おいそのやまおろしにたえかねてよのおとろきぬらんとおもひやるこゝろぞ

○小神小池の分なれども二升ばかり一合ばかりくらいてもおさまりやすくすぐにもとのごとくなるなり

(廿九)みてもまたとうしてもおりくしかさも人もうらやましき雪の朝ぼらけまだきに

何時

(三十)絵にかくもうつくしきものなれども実にはいたつてあしきものなり

(三一)雪ふかき山路をわけ入るこゝろぞ尊き

何時

(三二)雪ふかき山路をわけ入るこゝろぞ尊きよのおとろきぬらんとおもひやるこゝろぞ

女そだてかみ草

女のけうくんせうの品わかれ
いのさうぞくき女いろとこうそも
釈迦仏の御ちゑ
りやうけんやさしくわざ
うひまでに我儘気ひとうそひ
そのやすでまわるそも釈迦
つきやもんのうんいまの
ふりてもやとそのこせまで
わすき事たうりに釈の
やうにしてわん仏の
ぐうとうそうそうきう
ばうきうのおもひ
のひまでにもん釈の男
又女の男いまにうそうのそ
そうもまぬのろい一代も我男を
ぞうぶぐくいをぞーをまぬ
うるとはりそうぐぶーるくい
うるとにおのまでぶーるくい

一代守女

勢至	大日	不動	八幡
日廿三日	日廿八日	日廿八日	日廿五日
午の年	未申のこゝ	酉のこゝ	戌亥のこゝ

ゆくそうゆくそうりくそんみうしと

㊨二 帰のみ

㊨三 仏報の事仏の例つのよ仏
布施うらうそれつようやうさへ
まいりをくさめくなみもさそくも
釈仏のこうこうこうりうしと

日中

㊨三 くれなみくのりぬうこうきのく
けてくいそんまきくこうぬのり
仮世うさへ入りし物こうこうれ
うそこうれ仏のこいこうりしと

ぬうのくんぬ

㊨四 ろうぬいぬあこうさうぬうのしと
さそくぬれうさおりてなくぬ
よこうりくまもそうおくり
うてくなこうしぬ釈迦
り物ちんようくぬをものやぬ拝仏
こうこいうそこうこうみくそうと

千手	虚空蔵	文殊	普賢
日十七日	日十三日	日廿五日	日廿四日
子のこゝ	丑寅のこゝ	卯乙辰	巳のこゝ

そんなぞくしゃうぞそのけうぞを
ひとりにまとゆひうそもく
そんなの邪ぞや」日も我男をゆる
してまぬこうんのよいのりいも
おくりやうぬぐんぞれいうるび
てうのぞも仏を分てわうぎ
なぐうぶぐうそうぶわうひいろびに
なぐぎうおぎるひうぐうまのをを
なぐうおうおりまいびうりに
の文殊いこそうといる弥
人仏ぬ仏ぬ我ぬまこんを
ひとにおうくいけもぞぐうき
玉女のぬむうおうぐぐうぐよ
ぎいい足男の邪玉女ぎんにこと
うやまんでうぐうもうおうぐ
うぬ仏ぬぎんうそんなの世そ
もおうぎんぬぎ玉ぬゆるうろう
そそこうぬ仏うぐうぐうぬうこと邪うぐべ

うしと

日中

㊨五 そのりぬやうぬのりそよしそらま
ぬしぬうさ今し玉ぬうまりん
そうるぬうくいうぬりくのく
ねうし強うつくりぬ仏ぐうぐうぐ
ぬうぬうぬうぬうぬうぬうぬうぬう
雷のうんぬ

㊨六 市ぬいむぐうをぬいうちぬぬの中殿
そうぐうぬうぐうぐ玉ぬうぬうぬ
中玉ぬまぬうぐ中玉ぬうぬうぬ
ぬうぐうぐうぬうぬうぬうぬうぬう
ぬうぐうぐうぬうぬうぬうぬうぬう

日中

㊨七 そうぬの神仏けうぬうぬうぬうぬう
そんぬ中ぬ波うん中よ玉そうし

我おこなひいひがてゝ世の人れ見ゆんてもれしつゝ世紙をつり人を知る心をおもてこれよくにん商人のつまい物多利欲のちまたに落入る事なれば物でとふうりやすれば人の為にをの

○おくひ合せ
○ひとりに寝ちまう志
○くさだに人の見る志
○みんにくさだの比
○あさつきにさだ
○ちさにあめさなう
○なづなにかんざう
○みんにくうろこなる魚
○かしにふなかいなり
○ひめにまうせい
○柿にかよさけ
○くるみにきでかも
○見えんにかよびんらじ
○すもになまごすめ
○ふもにひとりじ

もつかをいさけなくこそは所へても志
さし紙方紙も打志れつゝひろゝ物と
ろさ人の笑も今更知りくなりしと

(四十八)
清茶様出福体出し夜も時なふ
いかりくのきれよりし物くはめてさく
有よりし出来も行ま付ざれよものと
みなくなり恨いの中うれいなりし
行くまいよりしくりくよりしと

同中

(四十九)
ふくさよりし出ものも此程は
風のいかれし引籠をしのよりかり
うめれは来れはまつれとも事のとく
をみりしさそれは此一籠はまひのあ
あ事まいをしと

夜さに招く女

(五十)
夜せにまへは出ないは出雅夏なきそれ
うりて産業様もよりしまきてなり

つゝそれはかふさそしろづく
くいやきものよ如ゆんじ義理
をしいて利欲をこれざかりむ
さがるしひとうすとしたい
こうのいとくけんふいかりとして
さんとかりしめあくふいれうと紙
してやぶれむ家は漢書あれば
まよしは海なるつぎらひよあらど
漢書は立ちんを人に祝いふは
立ちんとやぶるといつりもより
人のつまとしていそのおつとに志
たがふいろなりさりとそまさ
おつとのあくぎゆうとなす
とれいろそこれといさめど
してもあるものに志さがいまを
ふざのつぎらひよおちいりしると
いふものせけに人のつまたる様
あらばされいかもことぞ紙や
いけうやまひつしこそまことの
心よりいさめをなとべし

○さだうにふな行のこ
○くさびにかもきじ
○餘米にかしまのけ
○こいこてんなだう麻砂
○くづらにけいがい
○ふくさうにけいがい
しきの紙位毒ふ
あらうるにいろまめのせんじけのそは
○きじにふなあるる
みそば
○さだにひとりじ
○なまづにけいがい
○ふなにふかしし
ぞくもんざうにけいとり
○すなめにひとりじ
見ろうふ
○志んにぢさうかし
ゆあうぶねろうぶの
さぐひ

うしいりて出挟さんのかくは何ひかれ
ゆうにこのまよりしは五つ出身ア
付くそんらしと

同中

(五十一)
飯り出来をしさしらいは漢も
なくれりまして薄茶を仰よ出
抽ちうりゆ取てくそんらし林ふかい
いゆ都つしまれよ抽りくへは出ましまし
らしまましは越りまれ中に結りしと

振舞招きの女

(五十二)
明るは川原中きまし夕供清上まう
をてくは出る奥もいたきましくへも
高麗の引手清麗の絹布さしたるさ夜
なと産なぐらい絹に入まをくんまし
いおりまれ中にねらいよりしと

同中

(五十三)
兼くの紙をあひよく出紙のいうは
さふ明るは此ふましおちやにくも上まを

口を禍の門といふす
ある母池の沼に毒一つ存ニ
とかり内にたひぞりしてさい
あかりさしゆへ存よそへとび
さらんとは毒存にいくく各
そつぞさありていづくともし
たとやとしられも心さるに
久しく住なれるに見をそ
ゆくといふがんきくさらば
毒もつきて行べしとて本の
えごと毒にくるへさせいかう
のすけりとを口をあくたと
なれとをしへふたつのがんは
本のえごれあのとしとくらへ
ほく市のまへをつくるとれ
まんべあつまりこれをなう
じてまんべ毒をしとそ
あくこうせんとおりふたつ
いぐきてくらをひらまは
枝よりおりてひかしくぬし

京女郎行せ
○父をたらちを又
とりぬいふ
○母をなちめ又
かすぬいふ
○男子をまこといふ
○女子をおごりやうと云
○中四男をおく母と云

○そなさをそかりと云
○祥をおもづまると云
○おきるをおひるると云
○中そ女をおそかりと云
○殺りきをもかりと云
○おぼるをめかりと云
○先比をせんかりと云
○たりをしらきと云

さくら漸初花も見えしけるへいのうちを奥
とおりしめしに鍼祈りいけりしとし

元服祝紙の事

(五十四) 今ふいに吉日をそいふ男子に元服あそい
さをれるよりに神冠の事沼なるい
ましとりしとく中国見いてしんの沼
意のなと粒くなりかたそれよりしとし

同中

(五十五) 中子見月に元服をいし粒くかそ変
そみけし先りしちかれ見結まをとり鍼
よ結も似合をれすくやうのいろうろに
鍼そのなとをいりけりしとし

貴子の悦ひ

(五十六) うのくに鍼のに貴子を鳥よく御付
さをれるよりし粒くゆりてくそみ上
けし鍼更才くれに女子なと祈り粒
一入のに悦ひけるなまもしもいりけり
いのしくなりしとし

とえ三思一言九思一行といふ
ろうすもあるをいへこれなぎなひ
の門とも行きにいへばなることを
いふそこかを禍あるべし毒を
いえでまづくとりすそよ郭云
これなのをいへばなるすへ行す
もいへぬがほしとしたれを郭云の
あのあまり使まれしさふそのの
ぞとりそ四りといふ四ろるべし
子貢が言云も郭子一りくにあり

○中みをおづさといふ
○祝ひきをめづらう
○そうくをえやく
○晩初ごとタいさ
○十四夜をすりじ
○いへづとをこやげ
○ふらぬといりせ
○雷ないをおりは
○みづ云をあぐき
○十三夜を小ちら月
○十四日の月をまるひ
○十五夜をまん月
○十六夜をいざよひ
○いくんといさめ
○あのといねといふ
○いりといろれて
○おぬるといみぐき
○只弟をそしかう
○ふるれ海をちいろ
○天子は法を玉気をな

同中

(五十七) よれに事に産よりけしに貴子あい
粒りけ百かうよくむうへさをれと結粒く
かそ変そみけし女子の花れ登をとい
ふのこの程おこしけしいう汁にあしとし

系気下向のまへ

(五十八) 中国祝に系気の所中様くんのさす
けし中下向のよし粒くいかしを変ねけし
結よ中生産とし中稜并に名前の色
くいたまれ沼なく祈いてれけりしとし

同中

(五十九) 中系気にはうるくに下向なされて
よしおれてまし中生産いろくいた
まれけさて中稜の生麻に引をあ
まてまてそうていいてし粒くもかたし
けなさ沼さ母にあんこにれ入れし
ましまろくみりそよりしとし

願成就日

正月ゟ　二月ゟ
三月ゟ　四月ゟ
五月ゟ　六月ゟ
七月ゟ　八月ゟ
九月ゟ　十月ゟ
十一月ゟ　十二月迄

毎月吉日十六日

守本尊ハ地蔵尊二幅
よいせんじおうしやうそう
ちくりんざう卯かとんぎも
小くらくらくそんよ
千せんくらくと軸ハ
大日よいうりかふどうそん
いわ文ハもん

○うぐひすのり
○柳女ようりう
○ねもくとろろ
○ゑのもとろろ
○小そでとぎく
○つくつくおろろ
○茅ぢんおりゝ
○うなぎとろろ
○ささ竹とざゝー
○ぐつをおりろ
○米をうらまき
○めゝーをぐご
○みそをひー
○ろうそくおりや
○さけをさゝ
○からとやちんくゝ
○ゲすもゝをぎ
○わさ酒をなんん
○ぞうをさぢん
○ちまきをまんそく

不成就日〳〵
二月　十二日　十九日　廿七日
三月　十日　十八日　廿六日
四月　九日　十七日　廿五日
五月　八日　十六日　廿四日
六月　七日　十五日　廿三日
七月　六日　十四日　廿二日
八月　五日　十三日　廿一日
九月　四日　十二日　廿日
十月　三日　十一日　十九日
十一月　二日　十日　十八日
十二月　一日　九日　十七日

女中あの行〳〵
消息後文立ようとに二様まび
日付の判形あるべし立入二枚
ちらへ折てこれを二つまわして
男ゟ出す時ハ上へ紙ゟ二つ折にして
わふくわうじさし封のうら

ゟ　ゟ　ゟ

ゟ　ゟ　ゟ

上中下
ちうしん
ちうしんの行上中下の事
名まへのうへ計字と脇字とを下の
字とまじへ書べし尊敬ちうの
みうやまうの心ありようきう
うへといふ文字をまじへ下へ脇
にもべしたゞいのうへのぞくに
ちうしんなり

女用書物蔵板品目　菊花堂

女庭訓御歌文庫	全	女重宝記諸礼鑑	全
女業求艶詞	全	和国五節 賢女鑑	五冊
女今川	二冊	嫁取調法記	五冊
女用急見帳	全	女用急見帳 未刻	二冊
民家婚礼往用雛形	二冊	女筆君の代 長谷川氏著	二冊
婦人寿帳	六冊	伊勢物語 首丈倍増大	二冊
七夕系記	全	後撰帳 首丈絵抄	二冊

寶暦十三年
未七月吉辰

京都　画師　西川祐信
　　彫刻　石原半兵衛

京寺町三条下ル
菊屋七郎兵衛版